

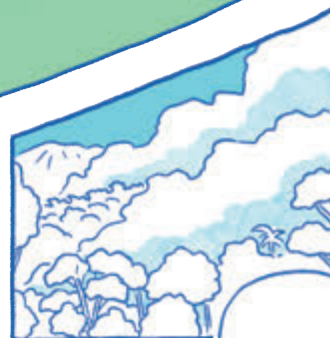
Center for Southeast Asian Studies

Kyoto University

京都大学
東南アジア地域研究研究所

要覧

2024/2025



教員・研究員数

46名



(2025年1月現在 ▶p.6)

連携研究者数

90名



(2025年1月現在 ▶p.37)

ジェンダーバランス

36.5%



(2023年度の女性比率 ▶p.36)

全職員数

110名



(2025年1月現在 ▶p.37)

ポストドク研究員の受入

16名



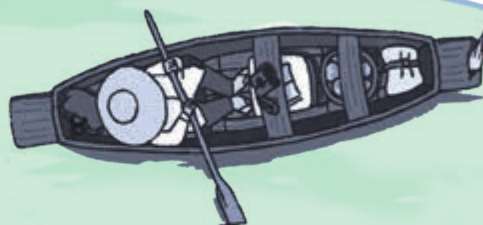
(2023年度 ▶p.32)

大学院生の指導

39名



(2023年度 ▶p.33)



1963 東南アジア研究センター設置（学内措置）

1965 東南アジア研究センター設置（官制）

1994 国立民族学博物館
地域研究企画交流センター設置

2004 東南アジア研究所（附置研究所）へ改組

1963



CSEAS at a Glance

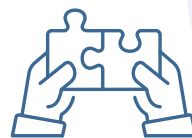


科研費採択数

56課題

(2024年度新規・継続課題 ▶p.19)

共同利用・共同研究
プログラム



24件

(2024年度採択数 ▶p.15)

国際プロジェクトへの
参加

23件



(2023年度実績 ▶pp.15-19)

イベント/セミナー数

80件



(2023年度実績)

数字でみる 研究所のいま

外国人学者の招へい

累計

450名

(2024年7月現在 ▶p.28)



部局間学術交流協定

67件

(23カ国、2024年7月現在 ▶p.28)



海外研究拠点

2拠点

(バンコク、ジャカルタ ▶p.29)



学術コミュニティ連携

アジア

17機関

(SEASIA、2025年1月現在 ▶p.27)

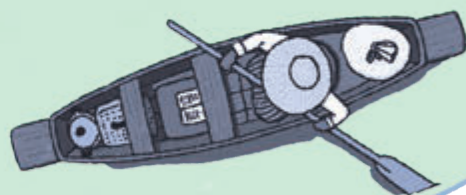
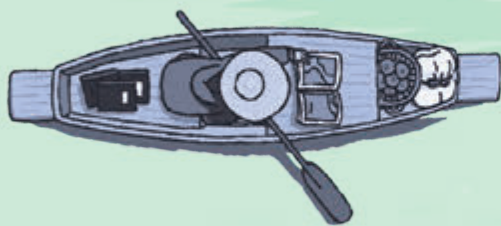
国内

107機関

(JCAS、2025年1月現在 ▶p.26)

2025

(沿革 ▶p.38)



2006 京都大学地域研究統合情報センター (CIAS) 設立

2017 東南アジア地域研究研究所 (CSEAS) へ改組

2022 共同利用・共同研究拠点「グローバル共生に向けた
東南アジア地域研究の国際共同研究拠点」に認定

受賞数

36件

(2017年度～2024年2月まで ▶p.34)



所蔵図書

27万点

(▶p.24)



地図・画像資料

6万点以上

(▶p.25)



東南アジア諸言語資料
約

10万冊

(▶p.24)



著書刊行件数

171件

(2020-22年度の合計。分担執筆を含む)



論文発表件数

153件

(2020-22年度の査読有論文件数の合計)



基金数

2基金

(2024年7月現在 ▶p.36)



目次

数字でみる研究所のいま 2

ご挨拶 5

研究 6

研究部門 6

拠点事業・国際共同研究 15

共同利用・共同研究拠点事業（GCR） 15

海城アジア遺産調査（MAHS） 16

日 ASEAN 科学技術イノベーション共同研究拠点（JASTIP） 17

産学連携による協創プログラム：ダイキンプロジェクト 17

研究ユニット 18

京都大学研究連携基盤未踏科学研究ユニット（DASU） 18

各種プロジェクト 18

日本学術振興会科学研究費助成事業 19

出版 20

研究叢書 20

学術誌 21

多言語オンラインジャーナル 21

ワーキングペーパー 21

CSEAS クラシックス 22

ディスカッションペーパー 22

教員の出版物 22

図書・情報基盤 24

図書室 24

地図・資料室 25

情報処理室 25

学術コミュニティ連携 26

地域研究コンソーシアム（JCAS） 26

アジアにおける東南アジア研究コンソーシアム（SEASIA） 27

グローバルな学術交流 28

学術交流協定 28

外国人学者の招へい 28

海外連絡事務所 29

研究交流 29

ネットワークマップ 30

教育 32

東南アジアセミナー 32

研究員の受け入れ 32

大学院教育 33

学部生向け教養・共通教育 33

高大連携事業 33

受賞・栄誉 34

アウトリーチ活動 34

ビジュアル・ドキュメンタリー・プロジェクト（VDP） 34

たんけん動画 地域研究へようこそ 35

ブックトーク・オン・アジア 35

コロナ・クロニクル—現場の声 35

東南アジア図書室保存基金・図書室の一般公開と資料展 36

各種媒体による情報の定期配信 36

男女共同参画推進の取り組み 36

スタッフ一覧 37

沿革 38

アクセス 38

Greetings

ご挨拶

東南アジア地域研究研究所では、人文社会科学から生命科学を含む自然科学までさまざまな分野を専門とする研究者が集い、横断的な協力をしながら、東南アジアをはじめとする地域研究に取り組んでいます。地域の諸課題の解明には、さまざまな学問分野の体系がもつ物事の統合的理解の枠組みと、地域研究が本領とする「そこで起きていること」の実態の理解、この両輪が不可欠です。多様な研究者がそれぞれの分析視角をもち寄るとともに現場に迫り、現場の知恵とともに「地域で起きていること、起きてきたこと」を解明していく学際融合型・共創型の地域研究が、本研究所の特徴です。

2020年代に入り世界とアジアは大きな変調を経験しています。新型コロナウイルス感染症の世界的流行は、人々の生活環境と生活意識を大きく変えてしまいました。2010年代までは当然と信じられてきた国際協調、自由貿易や民主主義が、対立と統制に急速にとってかわられつつあります。一方で、社会のデジタル化が世界中で例外なく加速し、それが世界やアジアにおいて人々の生活のみならず、政治、経済の体制までも変容させつつあります。これらの要素が相互に影響し増幅させる関係にあることは明らかです。そして、そこには2010年代までの技術の進歩、市場経済化、社会変容がもたらした帰結の側面と、それへの反動の側面が、複雑に関わりあっているようにも見えます。

こうした変調は、地域研究に新しい課題を登場させるとともに、研究アプローチの変革を迫っています。一方ではフィールド調査や地域との共創がますます重要になっているにもかかわらず、その実施がより困難になっているからでもあり、他方で、地域研究に取り組むうえで、大量情報の利用やサイバー空間での事象の理解の重要性が高まっているからでもあります。われわれは、新しい環境がもたらす新しいチャレンジに臆することなく取り組んでいきたいと思っています。

パンデミックの間、海外往来が極端に制限される未曾有の環境のなかでも、本研究所は活発な活動の維持を模索してきました。幸い2023年度からは海外渡航調査、研究者訪問ともにコロナ前と同じ活況を取り戻し、現地での大規模なセミナーなどもようやく再開できています。2022年度末には地域情報学を牽引された原正一郎教授が、2023年度末には大陸部東南アジアの農学研究と文化人類学研究を牽引してこられた河野泰之教授、速水洋子教授が退職されました。それぞれに当研究所や前身組織の部局長を務め、研究所の発展に長く尽力してこられた方々です。その一方でイスラーム文献研究を専門とするマジッド・ダネシュガル准教授、開発経済学を専門とする翟亜蕾准教授をはじめ多くの若手の助教や研究員が新たに着任されました。

研究所に新しい風を吹き込んでくれる新世代のスタッフとともに、いろいろな変化に対応し、そしてやってくる変化を先取りして、研究所の活動を展開して参ります。

2025年3月

京都大学東南アジア地域研究研究所

所長 三重野 文晴



本研究所の活動や施設についてよりよく知っていただけるよう、研究所紹介動画を公開しています。以下のURLまたは右のQRコードより、「京都大学の地域研究：特徴と挑戦」「研究所の学問的多様性」「出版活動と国際ネットワーク」の3つの短い動画をご覧ください。https://youtube.com/playlist?list=PLYNr5XeQb9WKazud2f56_wHX1_bjSzdzb&si=m7y1YAlDcQ7hTFvo



Research 研究

研究部門

<https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp/staff/>

関連地域、政治経済共生、社会共生、環境共生、グローバル生存基盤の5つの研究部門が、本研究所の研究活動を中核となって支えています。各研究部門はそれぞれ、主として自然科学、人文学、社会科学に立脚した研究を推進しています。

(2025年1月1日現在)



Cross-regional Studies 関連地域研究部門



地域を横断するかたちで情報資源の開拓と先駆的な研究活動を推進することで、地域研究の研究アプローチを発展させることをめざします。基礎研究だけでなく、社会との連携および実践型の調査研究を多様なかたちで推進し、公共の領域に資する学術活動としての地域研究を展開させることもねらいとしています。

R. マイケル・フィーナー

R. Michael Feener

教授

専門 歴史学 イスラーム研究

キーワード インド洋の歴史 イスラーム法と社会
宗教と開発 東南アジアの言語と文化 モルディブ
及び海域アジア遺産調査



研究関心 イスラーム研究、特に東南アジアとインド洋世界のイスラーム社会の歴史を中心に研究を進めています。最初の2冊の著作はインドネシアにおける法の思想と実践の歴史を扱ったものですが、法制史にとどまらず、インド洋沿岸のイスラームの海洋世界も射程に入れています。その他、ムスリムネットワーク、クルアーン研究、スーフイズム、シーア派、地域横断史、アチェとモルディブの歴史など、さまざまな分野で研究を行ってきました。現在、オックスフォード大学歴史学部アソシエイト・メンバー、メルボルン・ロースクールのインドネシア法・イスラーム・社会センターのシニア・アソシエイト、海域アジア遺産調査 (MAHS) の代表も務めています。

小林 知

Kobayashi Satoru

教授・副所長

専門 地域研究 文化人類学 比較社会学

キーワード 東南アジアにおける地域のエコロジー
とレジリエンス 地域研究という学知の将来像 生活
創造に関する社会運動



研究関心 近代国家の統治とグローバルな資本主義経済の浸透のなかでも地域ごとに独自に展開している多様な社会文化の動態を調査研究し、その成果を発信することで、東南アジアという地域の個性と人間の生活の可能態についての理解を深め、より良き社会の実現についての実践を進めることに関心があります。主な調査地はカンボジアです。最近、食料を生産したり、食物を調理して食べたり、子供を養育したり、信仰の場において祈ったりといった自身や家族の生命を支えるための諸行為や、看取りや葬送にみられるケアの文化や共同性に特に注目しています。地域研究という学知の将来像や、より良い生活の創造に関わる超学際的な研究にも関心があります。

山本 博之

Yamamoto Hiroyuki

准教授

専門 地域研究 メディア研究

キーワード マレーシア地域研究 ナショナリズム
と民族 災害対応と情報 映画と演劇 南方抑留と
引揚げ



研究関心 マレーシアは、マレー系、中華系、インド系、先住諸族を含む多様な背景を持つ人々が、それぞれの文化を維持・発展させながら全体で調和的で繁栄した社会を作るために腐心してきました。その経験には今日の日本と世界について考える上で参考になるものがあります。生活様式やものの考え方が互いに異なる人々が、域外からもたらされる人々や技術の力を借りながら、共通の理解を育てて社会を運営してきた工夫として、演劇や映画を通じた共通の物語の創出、新聞・雑誌を通じた国家像や民族像をめぐる議論、第二次世界大戦後の日本人抑留者が現地の政治過程に与えた影響、自然災害からの復興過程における社会秩序の再構築などを研究しています。

西 芳実

Nishi Yoshimi

准教授

専門 インドネシア地域研究 災害対応
人間の安全保障 移民 地域情報学

キーワード 多言語・多宗教社会における災害対応
災厄体験の共有・語り直しと社会統合



研究関心 グローバル化と民主化が進んだ今日では、人々の政治行動はイデオロギーや経済状況などの指標によっては容易に捉えることが難しくなっています。このような状況で、社会内部で考え方の差異の積み重ねとして生じる「社会の亀裂」をどのようにして捉えるかは、今日の東南アジア社会を捉える上で極めて重要な課題です。現在の研究では、復興と社会のレジリエンス（打たれ強さ）の概念を取り入れ、自然災害以外の社会的災厄（戦争・革命・政変）の「語り直し」に注目することで、社会的災厄によって生じた社会的亀裂の現れ方を明らかにするとともに、それらの亀裂に社会がどのように対応しようとしているのかを明らかにしようとしています。

マイダ・イラワニ

Maida Irawani

特定研究員

専門 文化遺産研究 インドネシア モルディブ

キーワード 文化遺産管理 教育とジェンダー研究
海域アジア遺産調査



研究関心 2015年に地質学、地形学、歴史学、考古学を組み合わせたアチェ・ジオハザード・プロジェクトに参加したのをきっかけに、文化遺産管理の経験を蓄積してきました。2018年にはオックスフォード大学イスラーム研究センターのモルディブ遺産調査プロジェクトに参加し、プロジェクト監督者として2年以上にわたりモルディブの6つの環礁をフィールドチームとともに旅しました。現在は海域アジア遺産調査のプロジェクト・マネージャーを務め、京都を拠点に、5カ国の現地チームと連携しながら調査を進めています。

クリスティナ A. バラニャイ

Krisztina Anna Baranyai

特定研究員

専門 考古学 東南アジア研究 地理情報学

キーワード 東南アジア考古学 文化遺産管理
考古学 GIS データベース 海域アジア遺産調査



研究関心 ハンガリーのペーチ大学で考古学の修士号を取得し、同国バルトン博物館およびギョツェイ博物館にて考古学者および博物館司書として数年間勤務した後、渡英。大規模フィールドプロジェクトで収集した空間データの管理と処理の経験を積みました。主な関心はGISと空間データ分析です。2019年にはオックスフォード大学イスラーム研究センターのモルディブ遺産調査プロジェクトに参加しました。豊富な考古学と現地調査の経験により、海域アジア遺産調査の京都ラボでデータとデータベースを管理しています。

マリア・エリザ・アガビン

Maria Eliza Hidalgo Agabin

特定研究員

専門 文化遺産研究 東南アジア

キーワード 海域アジア遺産調査 文化遺産と開発
歴史的都市景観



研究関心 海域アジア遺産調査 (MAHS) プロジェクトの文化遺産資料マネージャーを務めています。イタリアのITC-ILOトリノ開発スクールで世界遺産と開発のための文化プロジェクトの修士号を、フィリピンのサント・トマス大学で文化遺産学の修士号を取得。これまで、東南アジア、特にフィリピンの遺産管理に携わってきました。タイのバンコクにあるSEAMEO SPAFA Regional Centre for Archaeology and Fine Artsでは、遺産と気候変動に関するプロジェクトにも参画しました。フィリピン北部では、遺産保存、考古学、人類学、歴史学、博物館学にまたがる遺産プロジェクトを管理しています。

シク・マフユル・ラーマン

Sheak Mahfujur Rahman

特定研究員

専門 歴史学 考古学 地域研究

キーワード 空間データ 文化遺産 3Dモデリング
バーチャル博物館



研究関心 海域アジア遺産調査 (MAHS) の空間データ技術者として、インドネシア、モルディブ、タイ、日本の歴史文化遺産を記録・保存するための空間データ取得とGISデータ構築手法を探究しています。MAHSでは3D可視化モデルの制作やデジタルワークフローの管理、デジタル遺産のメタデータ整理を監督しています。バングラデシュのジャハングルナガル大学で考古学の学士号と修士号を取得。バングラデシュでは気候変動の影響を受けた地域におけるフィールド考古学の実践として緊急文書化や文化遺産のデジタル保存に従事してきました。

クワン・チン・イー

Kwan Ching Yi

特定研究員

専門 文化遺産調査



研究関心 海域アジア遺産調査 (MAHS) では調査員を務めています。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス&ポリティカル・サイエンスで国際関係論および歴史学修士号を取得。研究テーマは、ラテンアメリカやアルジェリアの国際政治、第二次世界大戦中の英米の核兵器原料獲得に関する世界史まで多岐にわたっています。ロンドン滞在前にはシンガポール国立大学アジア研究所で助手を務め、東南アジアの文化の多様性に刺激を受けました。MAHSのチームとともに知的な旅を続け、海域アジアの遺産保護に貢献できることをたいへん嬉しく思っています。

パインテットピョー

Paing Thet Phy

特定研究員

専門 フィールド考古学 デジタル文化遺産
地理空間分析

キーワード ミャンマー、バガンにおける集落考
古学 ミャンマー沿岸部における文化遺産影響評価
タイ、アユタヤにおける文化遺産建築情報モデリング

研究関心 私の研究はフィールド考古学と最先端のデジタル方法論の架け橋となるものです。フィールド考古学の訓練を受け、発掘、調査、遺産記録プロジェクトへの参加など実地での経験を通じて、文化遺産保護と遺跡分析への理解を深めてきました。現在は、リモートセンシング、GIS、3D モデリング、遺産建物情報モデリングを使いながら、地理空間技術と考古学研究を統合しています。中でも LiDAR データの処理、遺跡の没入型 3D 再構築の作成・調査や一般向けデジタルイラストを開発しています。考古学的フィールドワークとデジタル考古学を組み合わせ、文化遺産管理の進歩に貢献し、古代遺跡が後世にデジタル保存されることを目指しています。



石井 周

Ishii Hiroshi

特定研究員

専門 海事考古学 戦跡考古学

キーワード オーストラリアにおける日本関連戦跡
と遺物 ミクロネシア連邦チューク諸島の日本関連
戦跡

研究関心 日本は戦後 80 年を迎えようとしています。戦前・戦中を知っている世代が徐々に減少していく中で、戦争という国民を総動員した大規模国家プロジェクトの記憶を正確に後世に残していく重要性は日に日に増しています。日本の戦争とその影響は国内に留まらず、物理的痕跡（戦跡）もアジア太平洋地域を中心に地上から海底まで広範囲に残されています。また戦争に巻き込まれた海外の土地の人々の間でも日本の戦争の記憶は伝承されています。海事・戦跡考古学の手法を通して戦前・戦中の過去が実際にどのような、現在どのように残っているのか。また人々がどのように戦争についての記憶を、それらの戦跡を利用しながら後世に伝えていくのに関心があります。



フィクリ・アブドゥル

Fikri Abdul

特定研究員

専門 データ処理 データベース管理

キーワード ソフトウェア開発 データ処理 ビッ
グデータ プロセス自動化

研究関心 オーストラリアのアデレード大学で起業とイノベーションの修士号、イタリアのボルツァーノ自由大学でコンピュータ学の学士号を取得した後、2017 年より国際移住機関 (IOM) やインドネシアのユニセフなど国連機関で IT 専門家、プログラマーとして人道支援に従事。この分野での経験は 10 年以上に及びます。2024 年に海域アジア遺産調査に参加し、データ処理とデータベース管理を担当しています。関心のある分野は、ソフトウェア開発、データ処理、ビッグデータ、プロセス自動化など。



Political & Economic Coexistence Studies 政治経済共生研究部門



東南アジア地域とその周辺地域における政治経済のダイナミックな変容を分析し、比較検討するためのフレームワークを構築します。これらの変容を理解し、地域のステークホルダーと継続的に連携しながら、個々の地域に即した政治経済発展のための戦略に資する研究を推進します。

貴志 俊彦

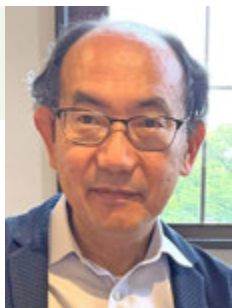
Kishi Toshihiko

教授

専門 アジア史 表象・メディア論

キーワード 地域社会からみる多様な冷戦認識
と記憶の検証 地域イメージをめぐるビジュアル・
ジャーナリズムの国際比較 環アジア太平洋世界の
地域秩序形成と戦争の影響

研究関心 いま取り組んでいるテーマは、ふたつあります。ひとつは、戦中写真の読み解きです。これは、2022 年から毎日新聞社、東京大学・渡邊英徳教授とともに、「毎日戦中写真」のデータを視覚化した「物語」を伝える新しいアーカイブの制作を進めています。また 2024 年からは、毎日新聞（東京版）で連載「戦中写真を読む」を掲載中です。いまひとつは、戦後占領期像を GHQ/SCAP（連合国最高司令官総司令部）の視点からではなく、イギリス連邦軍が一時的に占領した中四国地方の視点から再構成するという作業です。この成果は、2025 年 5 月に岡山文庫（日本文芸出版株式会社）の 1 冊として刊行すべく、現在鋭意作業中です。



岡本 正明

Okamoto Masaaki

教授・副所長

専門 地域研究 政治学

キーワード 東南アジアの地方政治研究 東南ア
ジアにおける脱市民社会組織研究 東南アジアにお
けるデジタル化のインパクトの学際的研究

研究関心 ①東南アジア、とりわけインドネシアにおける地方政治アクターの変遷の分析をしています。民主化した東南アジア諸国のなかには、いわゆる政治王国とよばれるものが地方に存在します。中長期的スパンで、その国別、地域別特徴を明らかにすることを目指しています。②東南アジア諸国には、民兵団など、国家の暴力装置である軍隊や警察とは違って、民間レベルで暴力をリソースとする集団や組織が数多く存在します。こうした集団や組織の特徴をその構成員の社会的背景などに着目して分析しています。③世界的に見ても東南アジアでは急速にデジタル化が進んでおり、日常生活や選挙に大きな影響を与えています。データサイエンスの知見を借りながら、その多面的インパクトを学際的に研究しています。



パヴィン・チャチャワールポンパン

Pavin Chachavalpongpan

教授

専門 政治学 国際関係論

キーワード タイの国内政治と外交 東南アジア政治・国際関係



研究関心 現在の研究テーマはタイの政治発展と外交政策です。タイ政治の民主化において、主要な制度、特に王制と軍が果たす役割について研究を進めています。また、マルチモーダリティと相互依存の時代におけるタイの外交政策の変化についても研究しています。

中西 嘉宏

Nakanishi Yoshihiro

准教授

専門 東南アジア研究 比較政治学 国際関係論

キーワード 現代ミャンマーにおける紛争 ポストコロナル国家論 インド太平洋の地域秩序



研究関心 なんとなくはじめたミャンマーの研究も気がついたら20年を超えました。専門の学問分野としては政治学とか政治史とか国際関係論になるでしょうか。150年くらいの時間軸でこの国と東南アジアの変化を視野に入れて、主に国家と暴力の関係や、社会秩序の固有性に関心を持ってきました。ミャンマーでなぜ軍事政権が続くのかという問いから研究をスタートさせて、その後、民主化、民族・宗教紛争、司法政治、アジア外交、脱植民地化過程の見直し、他にもインドネシアやパキスタンとの比較など、少し不節操気味に手を広げてきました。どのテーマもあり明るものではないですし、現地調査で緊張感のある場面に出くわすこともあります。まあ、それはそれで楽しめる性格なので無問題。

翟 亜蕾

Zhai Yalei

准教授

専門 開発経済学 地域研究

キーワード 東南アジア(主にミャンマー) 農村の貧困問題 家計と個人のさまざまな意思決定のモデル化



研究関心 一般的な統計に表れない家計と個人の生産・生活に関して、細部までのデータを収集し、それらのデータや情報に基づいて、途上国の貧困削減に関する実証研究を進めています。例えば、ミャンマーの出稼ぎ労働者を対象とする論文では、貧しい家庭出身の女性労働者ほど、送金して家族のつながりを維持することより、将来の結婚相手を探すための「婚活」へ投資していることを因果推論しています。その結果、出稼ぎの便益は貧困家庭には届かない可能性があるため、その貧困削減効果が限られていると言わざるを得ません。こうした研究を通して、途上国における貧困対策には何が重要なのかを解明し、実際の貧困削減へと繋げるように努めています。

久納 源太

Kuno Genta

機関研究員

専門 地域研究 都市研究

キーワード 住宅と公共空間 住民組織 防犯



研究関心 インドネシアを対象に、都市化の社会・経済的な影響をミクロ・マクロの双方から迫っていく研究を行っています。マクロな面では、公式統計や大規模データを収集して、村落ー都市社会の混合に特徴付けられる都市化の実相を再検討する試みを行なっています。ミクロな面では、都市生活におけるセキュリティの実践と道徳観念の多様化を切り口に、現代のインドネシア都市部を生きる人々の生活条件とその志向性の変化を明らかにすることを目指しています。具体的なサブ・トピックとして、投票行動における地域ファクター、ゲーテッドコミュニティと住宅セキュリティ装置の普及そして、婚前同棲の社会的受容を分析する研究に取り組んでいます。

菊池 泰平

Kikuchi Taihei

機関研究員

専門 地域研究 ミャンマー近現代史

キーワード ミャンマーにおける「連邦制」をめぐる言説



研究関心 ミャンマーにおける国民国家の形成を、「連邦制」をめぐる言説によって再検討しています。特に今注目しているのは、シャン地域出身の政治家たちに関する同時代資料や回想録です。1930年代の英領直轄植民地化（印緬分離）の議論から、国民国家としての独立、そして1960年代初頭における中央集権的な国家体制の見直しが行われるまでの間に、彼らが連邦国家の中に自分たちをどう位置づけようとしたのかを研究しています。国家統一に向かって単線的に描かれがちなミャンマー史ですが、当事者たちの回想録は、もしかしたらあり得たかもしれない国家の形に対する示唆を与えてくれます。

Social Coexistence Studies 社会共生研究部門



変わりゆく文化・社会・生態の相互関係に着目することによって、東南アジアおよびその周辺地域における複数の文化の共生について研究します。社会的・宗教的・言語的変容、文化や知の生産をめぐる政治、あるいは家族、ジェンダー、セクシュアリティなどの問題を、現代と歴史の双方の文脈において追究します。

小泉 順子

Koizumi Junko

教授

専門 歴史学 タイ史

キーワード タイ史 歴史叙述 学術史



研究関心 主として18世紀末から20世紀初頭におけるシャム（タイ）の歴史について、徴税制度、身分制度、交易・市場経済、ジェンダー、地域間関係などの側面から検討してきました。その際、利用する史料が誰の手でどのように作成され、いかにアーカイブ化され、あるいは編集・刊行されてきたのかという点に注意を払い、記されている内容を時代や社会の文脈に位置づけ、史料の政治性を踏まえて理解するよう努めています。さらに自らの研究やそれを取り巻く国内外の学術の様相を歴史的に理解すべく、地域研究、東南アジア研究の歴史にも関心をもっています。

帯谷 知可

Obiya Chika

教授

専門 中央アジア近現代史 中央アジア地域研究

キーワード 中央アジアにおける社会主義的近代化の諸相 ウズベキスタンのナショナリズム 「トルキスタン集成」編纂史の解明とデータベース化



研究関心 ウズベキスタンを主な対象として中央アジア近現代史・地域研究に携わっています。最近ではソ連時代の社会主義的近代化とは何であったか、ソ連解体後のポスト社会主義期のウズベク・ナショナリズムのもとでの「伝統的でナショナルな価値」はそれとどのような関係にあるのか、社会主義的近代化を脱構築して「想像される社会」とはどのようなものか、こうした課題を装い、イスラーム、女性といった切り口から考えています。また、中央アジア地域研究希少資料の保存・共有・活用の観点から、民間で見出された家族アーカイブの整理を通じて、ロシア・満洲・日本・ウズベキスタンにまたがるある白系ロシア人家族の軌跡を追いかけています。

大野 美紀子

Ono Mikiko

准教授

専門 地域研究 ベトナム史

キーワード デジタル化時代におけるオリジナル資料研究の意味と図書館の役割 地域情報資源共有化プラットフォーム構築に係る基礎研究 ベトナム南部における地域住民のレジリエンス研究



研究関心 本研究所が所蔵する在バンコクベトナム寺院漢喃經典資料の利活用と保存を通じて、オリジナル資料のモノ及びテキスト研究の位置づけ、研究所図書館としての役割を考察しています。また、日本における海外ILLが減少傾向にある一方で、近年重要性を増すアジア諸国における地域研究業績を収集するため、インドシナ3国、とりわけベトナムとの間を結ぶ「デジタル配信によるドキュメント・デリバリー・システム（Electronic Document Delivery Service）」の構築を目指し、実施に至る諸課題の抽出・分析を行う基礎研究を進めています。インドシナ戦争後、ベトナム南部における地域住民のレジリエンス過程を介して、南北統一後の国家と個人の関係についても研究を進めています。

カロライン・ハウ

Caroline Sy Hau

教授

専門 国際関係論 地域研究 文学

キーワード フィリピン 東アジアの知識人ネットワークとその交流 フィリピンのナショナリズムと文学 フィリピンと東南アジアの華僑・華人



研究関心 私はこれまで、文学をはじめとする様々な文化実践が、地域や国、世界各地域、あるいはグローバルなレベルで共同体の構築と解体、再構築の中で果たす役割について、主にフィリピンを中心に研究を行ってきました。最近では、フィリピン文学の中で、感情や情緒が果たす大きな役割について関心を持っています。現在取り組んでいるもうひとつのテーマは、「南洋」と呼ばれる地域の大衆文化です。フィリピン、インドネシア、タイなど、何世紀にもわたる中国-東南アジア間交流の歴史を持つ国々の大衆文化について学ぶことは、「南洋」の概念や分析枠組みを批判的に再考し、再評価することにつながると考えています。

デーチャー・タンシーファ

Decha Tangseefa

准教授

専門 政治理論

キーワード タイ・ミャンマー国境地帯 移民 境界



研究関心 もとは政治学と哲学の訓練を受けましたが、2000年以降は、暴力、差異、周縁性、時間性の4つの概念が絡み合う関係の中に研究を位置づけています。政治学、哲学、人類学、歴史学といったジャンルを厳密にわけるのはではなく、「中間的」な位置においてさまざまな学際的アプローチを採用してきました。具体的には移民研究と国境研究の接点で、特にタイとミャンマーの国境地帯に焦点を当てています。2008年以降は国境沿いの市民社会組織とも連携し、2008年から2011年にかけては、国境沿いの「難民キャンプ」にある大学で教鞭をとるかたわら、タマサート大学でも教育に携わりました。

マジッド・ダネシュガル

Majid Daneshgar

准教授

専門 東洋学 言語学 宗教 碑文 写本 イスラーム シア派 ペルシャ語・マレー語

キーワード 東南アジア研究 ペルシャ・インド洋世界 地域を越えた知的伝統 シア派 東洋学 宗教研究方法論



研究関心 地域を超えた知的伝統、 Shia派、ペルシャ・ Shia派、東洋思想、宗教学研究における方法論の検討を通して、東南アジア研究をより広範なペルシャ世界やインド洋世界と結びつけることを目指しています。また、現在は、碑文、写本、イスラーム科学、近代文学、政治、詩、スーフィズム、祈り、オカルティズムなどを通じてペルシャ語・マレー語世界の歴史的変遷をたどる研究を進めています。さらに、海域アジア遺産調査（MAHS）の発掘・保存資料を用いて、いくつかの新しいプロジェクトを立ち上げる予定です。

設樂 成実

Shitara Narumi

助教

専門 学術出版

キーワード 非英語圏における学術出版の現状と課題 引用データ分析による日本の東南アジア研究の変遷の研究



研究関心 近年、世界ではダイヤモンド・オープンアクセス出版と呼ばれる投稿料も購読料もとらない出版が見直されています。大学紀要をはじめとする日本の多くの学術誌はまさにダイヤモンド OA 誌であり、こうした流れは国内の学術誌の再評価や大学や研究機関が自ら出版機能をもつことの再評価につながるものと考えます。大学や研究機関による学術誌の出版を巡る現状と課題に関する調査研究、および機関誌・叢書出版のマネージング・エディターとしての経験をもとに、国内のオープンアクセス出版の推進に向けた議論や活動に取り組んでいます。DOAJ アンバサダーの経験や紀要編集者ネットワークの活動を通して日本における図書館出版の展開の可能性についても検討していきます。

土屋 喜生

Tsuchiya Kisho

助教

専門 歴史学 東南アジア研究 比較アジア研究 冷戦研究 ポストコロナリズム

キーワード 島嶼部東南アジアの歴史 知識の生産 オーラルヒストリー 密輸 下層からの歴史境界研究



研究関心 インドネシア領と東ティモール領に分断されたティモール島、フィリピンミンダナオ島等、国家の周縁地帯や国境地帯特有の歴史を主に研究しています。また、植民地主義、戦争と知識生産の関係、文章による記録を残さない人々に関する歴史叙述、場所と空間の生産史、一国史の枠組みでは捉えきれない国境と人々の移動の歴史的役割等を歴史学の対象とすることにより、周縁地域から世界史的問題を考え直すというスタンスを取っています。

土佐 美菜実

Tosa Minami

助教

専門 ライブラリアン

キーワード 学術情報 地域研究



研究関心 ライブラリアンとして、東南アジアにおける学術情報の流通動向や図書館・出版事情について関心があります。東南アジア各国のそれらの状況は、政治や経済、あるいは文化や歴史的背景などから実に多様で、かつ日々めまぐるしく変化していると言えるでしょう。こうした変化に精通しながら、学術書のほか、雑誌、新聞、政府刊行物等を収集・整理・提供し、研究活動の支援に役立てたいと思っています。

モスタファ・カリリー

Mostafa Khalili

特定助教（京都大学白眉センター特定助教）

専門 政治人類学 エスニシティとナショナリズム 国境紛争

キーワード エスノナショナリズムに基づく下からの動員を理解するーエスニシティを超越するアイデンティティの政治



研究関心 人類学的な視点から、特に政治的に不安定な地域におけるエスニシティとマイノリティ・ナショナリズムについて探究しています。エスノナショナリズムに基づく動員を理解するため、人類学的手法を用いて理論化を行い、中東で長らく続いているクルド人紛争を事例として、対立の主な要因が民族集団の違いにあるという一般的な見方を問い直すことを目指しています。私のこれまでの研究では、エスニシティは、地域の権力動態のなかで地位や帰属を求めるアイデンティティの政治を形づくる様々な社会政治的要因の一つに過ぎないことが明らかになっています。

Environmental Coexistence Studies 環境共生研究部門



自然科学、医学、情報学にまたがる学際アプローチを通して、地圏、水圏、生物圏および人間圏に影響を与える課題を研究します。地球温暖化、環境劣化、生物多様性の減少、自然資源の過剰搾取、感染症蔓延などの課題は、急速な経済成長や社会変革の渦中にある熱帯地域において特に深刻です。人間社会の長期的な持続可能性および人間と自然の共存のための知識の蓄積や理論の構築を目的とします。

山崎 渉

Yamazaki Wataru

教授

専門 食品衛生学 人獣共通感染症学 動物感染症学

キーワード 病原体の検出技術開発と国内外への普及 食品衛生 感染症対策分野における国際ネットワーク

研究関心 人の活動が引き金となって発生する新興感染症に興味を持っています。例えばマレーシアでは熱帯林を切り開き多くの養豚場を作った結果、1997年にニパウイルスが新しく出現しました。未知のウイルスを健康保有していた野生のコウモリが豚と接触する機会を得た結果、豚を介して人にウイルスが伝播し多くの死者を出したのです。人が野生動物の生息域に影響を与え続けているため、世界中で新興感染症の発生が増加しています。人・動物・環境が相互に健全でいられる状態はどのようなものなのでしょうか？新興感染症のホットスポット（発生頻度が世界で最も高い地域）である東南アジアの研究者と連携し、動物や環境に潜む病原体の研究をしています。



甲山 治

Kozan Osamu

教授

専門 水文学

キーワード インドネシア熱帯泥炭地の持続的な管理と科学的データの地域社会への発信に関する研究



研究関心 森林減少が著しいインドネシアでは、持続的森林圏の再構築が望まれています。近年、民間企業への長期産業造林権が熱帯泥炭地で付与されるようになり、大企業は排水路を掘削して水管理し、パルプ原材料のアカシア産業造林やアブラヤシ農園を開発しています。その周辺には小農が入植し、開発が急速に進んでいます。熱帯泥炭地における有機物の分解や火災は地球温暖化を加速し、ヘイズ（煙霧）の発生は地域住民の健康や生活に甚大な悪影響を及ぼしています。非泥炭地に比べてより科学的な知見に基づく管理が必要とされることから、現在、インドネシア政府と共同で水文・気象・火災リスク情報共有のためのスマートフォンアプリを開発し、科学的データの地域社会への発信を行っています。

柳澤 雅之

Yanagisawa Masayuki

准教授

専門 東南アジア生態史 ベトナム地域研究 熱帯農学

キーワード 東南アジア生態史 ベトナム農村開発史 地域情報学



研究関心 人は一人では生きられない。家族や仲間を核として人間の集団は、自然災害や社会経済の変動に対処して生きてきました。過去の経験を蓄積し未知の変動に対処するために、人間の集団はどのような工夫をしてきたのでしょうか。それを考えるために、現在、ベトナムの村落社会について研究しています。ベトナム村落は数世紀にわたり、強固なムラをつくり、王権や植民地政府への対応、大国との戦争、急速な社会主義化、市場経済の導入、グローバル社会への対応を経て、ムラ社会の中にさまざまな知を蓄積してきました。融通無碍に変化するムラの範囲を特定するのではなく、むしろ、変化に直面した際のムラの機能に着目し、時代を越えて共通するムラの役割を考えます。

坂本 龍太

Sakamoto Ryota

准教授

専門 フィールド医学

キーワード レジオネラ症 ブータン 高齢者医療 高所医学 プライマリーヘルスケア



研究関心 交通事故で搬送されたレジオネラ症患者を契機に、この疾患の原因となるレジオネラ属菌の生息環境、気候との関係、1976年の米国大統領選挙への影響など、人間と自然との関わり合いに注目しながら研究を行っています。ブータンにおいては、現地の方と協働で高齢者健診の仕組みを構築した他、村の保健を支える Village Health Worker の役割に注目しながら、基礎的な医療の普及を模索しています。東南アジア及び世界で進行する高齢化、高齢者を支える社会の仕組み、高齢者の伝統的な役割とその変容についても注目しています。

木村 里子

Kimura Satoko

准教授

専門 水中生物音響学 環境影響評価 自然共生システム

キーワード 沿岸生態系 水圏大型動物 高次捕食者 海棲哺乳類



研究関心 水中の大型生物、主に小型鯨類（イルカ類）などを対象とし、生物を定量的に観察する手法の開発および手法を用いた生態解明と環境影響評価に取り組んでいます。生物が発する音を利用した受動的音響観察手法、動物に直接機材を装着して行動データを得るバイオリギング手法などを用い、対象生物が発する音の特性や発声行動を調べたり、対象生物が「いつ、どこに、どのくらいいるのか」という基礎的な生態情報を明らかにしたりしています。また、沿岸における船舶航行や洋上風力発電などの騒音が生物や環境に与える影響評価（環境アセスメント）、水族館などの飼育施設における生物のストレス評価、ドローン調査も行っています。

木谷 公哉

Kitani Kimiya

助教

専門 情報処理 計算機システム開発・運用 データベース開発 地域研究 情報通信工学

キーワード 小規模データセットのための情報資源共有システムのためのデータベースフレームワークに関する研究 東南アジア逐次刊行物の資源共有化システム



研究関心 研究者がフィールド調査で収集するデータは、数百から数千程度です。この量では、デジタル技術を使った分析研究を行うには少なすぎると言えます。一方、このような少量のデータに対してデータベースを構築し、維持するためにコストを捻出し続けるのは困難です。そこで、このような小規模データセットを対象に、クラウドシステムを利用した研究データの保存・公開の手法として、手軽に公開できるデータベースのフレームワークに関する研究に関心をもっています。

小川 まり子

Ogawa Mariko

助教

専門 レーダー気象学

キーワード インドネシア熱帯泥炭地における雨量推定と降水過程の理解 防災気象情報の活用 ヘイズ発生時における上空浮遊物に対する電波散乱特性



研究関心 地下に大量の炭素を蓄えるインドネシアの熱帯泥炭地を対象に、火災や洪水等のための大気・水文気象防災情報の活用を模索しています。具体的には、リアウ州・ブンカリス県を中心として、気象レーダーを用いて降雨の地域特性や季節特性を研究しています。季節ごとの降雨量や降雨分布の理解を通じて、火災の開始時期を早期に特定することにつなげます。また当該州において大気汚染モニタリングも実施し、泥炭地火災や生活活動が大気汚染に及ぼす影響を調査しています。現在行っている大気環境計測、水文気象観測をアプリやウェブ上で統合し、地域住民や政府と連携しながら、双方向の防災情報の発信・共有を目指しています。

山田 千佳

Yamada Chika

助教

専門 公衆衛生 地域研究

キーワード 薬物使用 ハームリダクション 社会運動 HIV/AIDS ポスト・コロナリズム 公衆衛生史

研究関心 インドネシアで薬物使用する人たちの社会運動について学んでいます。90年代終盤から全国に広がり、保健政策にも大きな変化をもたらしました。薬物使用は違法で、その取引には死刑も適用される国で、社会運動はどのように展開されてきたのか。その担い手はどのような社会を生きてきた人々なのか。何が連帯あるいは断裂を生んできたか。社会運動と政府、国際機関等のステークホルダーは、どう影響し合うのか。社会運動は継承されるのか。「逸脱」とされ、対象化されてきた人たちの生き方や考え方を学び、その立場から国家や権力、医療、公衆衛生について考えたいです。



赤松 芳郎

Akamatsu Yoshio

特定助教

専門 農業生態学 農村開発学

キーワード ブータンにおける農村開発に対する地区行政の役割と展望に関する研究 学生による対話型聞き取り調査を通じた実践型研究に関する研究 減災・持続的農村開発に向けたミャンマー・イラワジデルタの屋敷地に関する研究

研究関心 ブータンでは1980年代に地方分権化が促進され、行政整備を踏まえた権限や財源が地方行政に委託されました。その一方で農村開発に対しては、中央政府のトップダウンによる取り組みに大きなスポットが当てられており、地方行政、特に地区行政が地域の開発や開発諸問題に対してどのような役割を果たしているのかは不明瞭です。本研究では、バングラデシュでその有効性が実証されてきた「リンクモデル」の導入を視野に入れつつ、農村開発に対する現在の地区行政の役割を明らかにすることを目的としています。



オフィンニ ユディル

Youdiil Ophinni

特定助教（京都大学白眉センター特定助教）

専門 ウイルス学 感染症学 地域ゲノム学

キーワード メタウイルス学 ウイルス伝播 環境メタゲノム学 HIV/AIDS インドネシア地域研究

研究関心 生命はDNAやRNAの遺伝文字の配列にコード化されます。次世代シーケンサーにより、数十億の文字を迅速かつ安価に解読できるようになり、サンプル中の全遺伝子物質の分析が可能になりました。私は、宿主や微生物に由来する遺伝物質がどのように生物間で排出され移動するのか、あるいは土壌、水、空気などにどのように流出するのかを探索しています。特定の地域から入手したサンプルすべてを配列決定することで、生物の歴史や種間の関係を理解し、人間活動や気候変動による影響を考慮してその運命を予測することができます。生態学と社会人文学の視点を組み合わせ、生態系の過去・現在・未来を理解するためのゲノミクスに基づく学際的なアプローチを目指しています。



Global Humanosphere Studies グローバル生存基盤研究部門



21世紀に起こっている地球規模の変容を批判的な視点で分析します。経済、政治、そして社会文化における喫緊の課題を研究するなかで、社会科学と自然科学という現代の学問分野の境界を超えて、人類社会と自然環境の共存への道筋を見出します。

石川 登

Ishikawa Noboru

教授

専門 地域研究 文化人類学

キーワード 非国家空間 エスノジェネシス 「山地-平地」関係 プランテーション サプライチェーン

研究関心 文化人類学者として、フィールドワークによって知ることのできる人々の営みとこれを取りまくマクロな動態や構造に注意をはらうこと、そのために歴史を意識すること、この二点を基本姿勢としています。主な調査地は、マレーシア（サラワク州）。近年は四国の中央構造体に沿った山地やペルーのアンデスとアマゾンの境界域などでも調査中。フィールドワークと史資料調査を通して検討してきたのは、国境地域における「領域国家」「国民」「民族」の生成過程、「山地-平地」関係、プランテーションと資本主義的自然、マルチ・スピーシーズ関係、日本の森林とボルネオの熱帯雨林の歴史的関係など。



三重野 文晴

Mieno Fumiharu

教授・所長

専門 東南アジア経済 開発金融論 経済学

キーワード ASEANの金融システムの構造 ラオス、ミャンマーの経済と金融 タイの数量経済史

研究関心 企業金融や債券市場、商業銀行の観点からASEANの金融システムの特質について研究を続けています。ここ数年はラオスの経済と金融問題についての政策対話への参加を踏まえた学術研究の成果を発表しています。ミャンマー経済研究とタイの長期数量経済史研究もゆっくりと再開し始めています。さらに時間とも相談しながら、「ラオスのマイクロファイナンス機関」や「日本の貯蓄のASEANとの資金循環の可能性」をテーマとする企業や官庁との共同研究に取り組んでいます。



村上 勇介

Murakami Yusuke

教授

専門 ラテンアメリカ地域研究 政治学**キーワード** 現代ラテンアメリカの政治変動に関する比較研究 ラテンアメリカの国家社会関係に関する微視的分析 ラテンアメリカにおける政治意識に関する実証的研究

研究関心 1980 年前後からラテンアメリカでは軍政からの民政移管など民主主義への移行と市場経済原理を徹底させる新自由主義の浸透という二つの変化が同時に進行する現象が観察され、それまでの政治経済社会のあり方を大きく変えてきました。そうした変動を経て今日にいたるラテンアメリカ諸国について比較し、変動をめぐる共通性と相違点を分析し、ラテンアメリカ以外の他地域と比較するための視座を構築することを目指しています。より具体的には、国家社会関係の変化、とりわけ新自由主義の浸透が政治社会にどのような影響を与えたのか、そしてそれが政党のあり方をどう変えたのか、という点を中心に分析を進めています。



マリオ・ロペズ

Mario Ivan Lopez

准教授

専門 人文学 比較文化論 国際文化論 少子高齢化**キーワード** 東南アジア研究における文理融合による日本型知識形成 アジア太平洋地域における看護師・介護士の国際的移動に関する研究

研究関心 日本の東南アジア研究において、学際的研究の基礎とアプローチがどのような条件の下で育まれてきたかを分析しています。量的・質的方法を通して、日本の学際的地域研究の位置づけと特質、そして世界の東南アジア研究への知的貢献を示すことを目指しています。もう一つは、急速に高齢化が進行する現代社会において、アジア太平洋地域から他地域への看護師・介護士の国際的な移動の現状とその影響について研究しています。それにより、日本において、東南アジア出身の看護師や介護福祉士の受け入れ体制の改善につながるような政策を提案することを目指しています。



町北 朋洋

Machikita Tomohiro

准教授

専門 労働経済学 産業発展論**キーワード** 企業間のマッチング 国際生産網形成と技術移転 途上国・新興国の交通事故 移民・外国人労働 職業・企業訓練と労働市場

研究関心 世界人口の4割強を占めるアジアを一つの巨大な経済空間と捉え、そこで産業がどのような力を借りながら発展するか、その結果として個々の社会に何が生じるかに興味をもって研究しています。具体的には東アジア・東南アジア地域の企業の製品やサービスの質が高まったり、販路や原材料・部品の調達網が広がったり、新しい技術や経営手法を導入したり、ひいては生産や流通の現場にロボットを導入するなど、その巨大な空間で企業活動の自由度が高まった時、労働者の立場が強くなるか弱くなるのか。また大都市圏に見られるような経済活動の地理的集中はどの程度進むのか。交通事故のリスクをどのように小さくしていけるかといった課題を考えています。



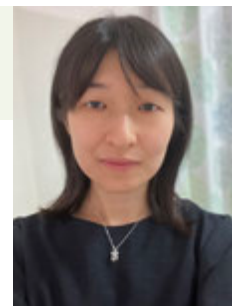
高橋 知子

Takahashi Tomoko

助教

専門 政治学 国際関係論 国際制度論**キーワード** 国際制度における主権国家の行動 国際制度におけるパワーポリティクスと主権・裁量権の概念、連合政治 国連総会とスポンサーシップ 中国、グローバルサウス (G77、非同盟運動)

研究関心 国際制度論は、世界各国が多様な分野の交渉を行う国際機関や、そこで形成されるルールや規範を研究対象としています。私は、国際制度が各国の行動を制約する反面、ルールづくりを通じて、各国は国益に適う環境を醸成できる点に注目し、国家がいかなる計算を経て、経済・安全保障上の規制を打ち出すのかを研究しています。具体的には、台頭している大国、国際制度を構築した欧米とは異なる価値観の、東アジアや発展途上国、権威主義体制の国々に注目し、政府にとっての物質的な利益や対外関係、さらに市民の観点から、理論・仮説を立てて分析しています。実証では、統計分析・多言語の史資料・インタビュー調査を用いています。



ジュリー・デロスレイエス

Julie Ann de los Reyes

特定助教

専門 地理学 政治生態学**キーワード** 資源地理学 エネルギー転換 自然と社会の関係 金融化 環境ガバナンス

研究関心 低炭素社会への移行は現代における喫緊の課題であり、実現に向けて集団的な行動が求められます。私は東アジアや東南アジアのエネルギー転換の動きを理解するため、石炭への投資（非投資）、新たに出現した水素サプライチェーン、開発金融機関の役割を中心に研究を進めています。それを通じて化石燃料からの移行によりクリーンエネルギー市場とサプライチェーンの創出を促すアクターとその関係、移行過程を明らかにすることを目指しています。こうしたエネルギー転換を可能とする条件を解明することは、従来の高炭素排出依存政策やそれがもたらした社会的不平等を克服し、環境と社会にとってより公正な制度をつくる上で不可欠だと考えています。



地域研究国内客員部門

根本 洋一 地域研究国内客員教授
岸 健太 地域研究国内客員教授
芹澤 知広 地域研究国内客員教授
藤倉 哲郎 地域研究国内客員准教授

研究員

大橋 麻里子 学振特別研究員（グローバル生存基盤研究部門）
Bektursunov, Mirlan 学振外国人特別研究員（社会共生研究部門）
Yu-Ning Chen 学振外国人特別研究員（社会共生研究部門）

Global Collaborative Research

共同利用・共同研究拠点

グローバル共生に向けた東南アジア地域研究の国際共同研究拠点 (GCR)

<https://gcr.cseas.kyoto-u.ac.jp/>

実施年度 2022–2028

協力機関 国内 34 機関、海外 31 機関 (9 カ国: アメリカ、イタリア、インドネシア、タイ、台湾、フィリピン、ベトナム、マレーシア、ラオス)



本研究所は東南アジアを主とした世界諸地域に関する総合研究を行うとともに、全国の大学その他の研究機関の研究者の共同利用に供することを目的としています。その中で本拠点は、複雑化する地球規模の課題を克服し、地域社会の多様な成長の実現に資する学際研究を推進します。本事業は 2022 年 4 月に「東南アジア研究の国際共同研究拠点 (IPCR)」および「地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点 (CIRAS)」の二拠点を統合し、新たな地域研究の創出を目指しスタートしました。

東南アジア研究に携わる国際的な研究者コミュニティの要望に応える共同研究を主導することにより、フィールドに立脚した文理融合型の総合的な東南アジア研究を推進していきます。また、国内屈指の東南アジア研究史資料ハブをさらに強化することにより、学内外の若手研究者養成を目指します。

現在、7 つの共同研究プログラム (2025 年度に地域情報学シードを追加) を公募により実施し、図書資料、地図・画像、地域研究データベースおよび所内各種施設を共同利用に供しています。

2024 年度共同研究プログラム

インキュベーション	地球規模で縦断・連携し防災に新たな展望を：日本、メキシコ、マレーシアのコミュニティエンパワメントの好事例と課題を分かち合う
	東南アジアにおけるマダニ媒介性感染症の実態解明と簡易迅速的な診断法の構築
	山村の景観形成においてヤマチャが果たした機能の検討にむけた分野横断的研究
	重層信仰論再考：次世代の東南アジア宗教論に向けた作業仮説構築の試み
	ジャカルタ首都圏の小規模経済活動に対するデジタル化のインパクト：地域社会の多様性解明に向けたマクロとミクロの融合的研究
パイロット・スタディ	人権の時代の東南アジア
	東南アジア現代アートの実践に関する考察：上演芸術を中心とした予備的調査
	「東南アジア型発展経路」概念の深化に向けた FieldNote Archive の可能性：インドネシア・南スラウェシを事例として
	メコンデルタにおける農業の持続可能性評価に資するための水循環機構の把握手法の検討
	東～東南アジアにおける世界農業遺産の推進に資するプラットフォームの構築
	地域研究に根ざしたアジア外交研究の創成
	インドネシア・ポロブトゥールのレリーフにおける仏教美術研究
	都市におけるタイヤイの社会空間：バンコクにおけるタイヤイの若者の社会空間形成に着目して
	養蜂の技術実践と家畜化をめぐる人類学的研究：ラオスにおける国際開発援助の事例から
	帰還に対するミャンマー難民の選択：カイン州のある村を事例として
	フィリピンにおけるウシ白血病ウイルス検出系の評価およびウシ白血病ウイルスを媒介する吸血昆虫対策としてのウシをシマウマ模様に塗ることによる影響の評価
	スマトラ島におけるマレーバクの個体群保全のためのゲノム、腸内細菌叢、食性解析

目的

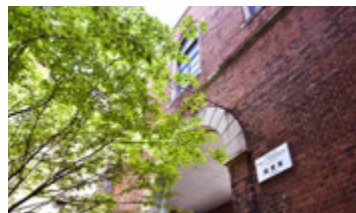
文理融合を目指した学際研究
グローバル課題を射程とした地域研究の革新
学術界を超えた研究プラットフォームの創出
日本と東南アジアを架橋する共創的研究の設計
国際的環境のもとでの研究者育成

共同研究プログラム

インキュベーション	プロジェクト形成をめざす研究者を支援 (2 年間)
パイロット・スタディ	海外本調査を構想する次世代研究者に短期予備調査の機会を提供 (2 年間)
成果発信	出版、オープンアクセス化、ワーキングペーパー等成果発信に関する支援
フィールド滞在型	バンコク・ジャカルタ海外連絡事務所を活用した研究 (2 年間)
客員共同研究	客員研究員制度を利用し外国人研究者と共同研究 (2 年間)
資料共有	所蔵図書・地図・画像資料・データベースを開放し研究に利用 (2 年間)
地域情報学シード	地域研究に情報学の知見や手法を導入し新領域開拓を目指す研究 (2 年間)

共同利用施設

図書資料 約 27 万点 地図・画像 約 6 万点 データベース 約 50 点
図書室 地図室 会議室 所内研究スペース



共同利用施設の一例
左上：図書室 (▶ p.24)
右上：地図室 (▶ p.25)
左：リサーチcommons

成果発信	東南アジアにおける中国の一带一路政策：概念と方法論
フィールド滞在型	情報化時代における東南アジアの辺境社会
客員共同研究	東南アジア農村社会における人々の機会とリスクに関する研究枠組み構築の試み
資料共有	フィリピン大学と日常の政治：路上、教室と大統領執務室
資料共有	タイ葬式本の資料共有化とその学術利用に係る実践的研究
資料共有	海峽植民地年次報告書統計資料のデータベース化と次世代研究の可能性再考
資料共有	ハノイ旧市街寺社神祠拓本から見る近代以後の都市変容に関する基礎研究



ベトナムでのフィールドワーク



共同研究会



2024 年度年次研究成果発表会

Maritime Asia Heritage Survey

海域アジア遺産調査 (MAHS)

<https://maritimeasiaheritage.cseas.kyoto-u.ac.jp/>

実施年度 2020-2025

協力機関 シンガポール南洋理工大学リークアンユー公共政策大学院

フィールド事務所 モルディブ、インドネシア、タイ



海域アジア遺産調査 (Maritime Asia Heritage Survey, MAHS) は、モルディブ、インドネシア、タイをフィールドとして、これらの国々の沿岸地域で散逸・滅失の危機に瀕する歴史文化遺産の体系的な把握と目録の作成、デジタルデータ化を行い、遺産情報の永続的な保存を行うとともに、オープンアクセスのデジタルアーカイブ構築をめざしています。

2017年からオックスフォード大学イスラーム研究センターを拠点として実施された「モルディブ遺産調査」事業で得たデータを2020年に引き継ぎ、R. マイケル・フィーナー教授をプロジェクト長として調査活動を継続・拡大してきました。

デジタルアーカイブには、現地での調査記録やデジタル写真に加え、遺跡や建築物の3Dモデル、オルソ画像、CAD図面、ディープズームで撮影された写本類、オーラルヒストリーのインタビューを録画したビデオ、その他の映像資料が含まれます。LiDARデータはOpen Heritage 3Dから無料でダウンロードでき、YouTubeやSketchfabには「MAHSチャンネル」を開設してデータの多角的な可視化を試みています。MAHSウェブサイトでは、調査地域

の歴史や文化への理解を助ける図解用語集、バーチャル図書館、3D年表、ブログを提供しています。さらにソーシャルメディアを通して最新ニュースや調査風景を積極的に発信しています。

MAHSは京都ラボを拠点に、各調査地にフィールド事務所を設置しています。フィールドチームはデジタル機器の操作技術やフィールド調査法に関する事前研修を受けてデータを収集し、クラウド経由で調査データを京都資料室へ送ります。京都資料室ではデータ整理とデジタル資産の作成、オープンアクセス可能なオンラインアーカイブへの統合を行います。MAHSでは現在までに、9万5,000件以上のデータを生成しています。デジタル記録を行った地点は約1,750地点に及び、約1,110の資料のデジタル化を行い、94のコレクションを所持しています。

このように、次世代をも視野に入れたMAHSの取り組みは、人文情報学において革新的なアプローチであるだけでなく、京都大学が将来、地域情報学の牽引者として他分野やより広い研究領域の発展に貢献する可能性をも秘めています。本事業は英国を拠点とする財団Arcadiaによる助成を受けています。



MAHS モルディブ、インドネシア、タイのフィールドチームによる文化遺産調査の様子

持続可能開発研究の推進 (JASTIP)

<https://jastip.org/>

実施年度 2015–2020、2020–2024

学内協力部局 ASEAN 拠点、エネルギー理工学研究所、大学院エネルギー科学研究科、大学院農学研究科、生存圏研究所、防災研究所

海外協力機関 タイ国立科学技術開発庁 (NSTDA)、インドネシア国立研究革新庁 (BRIN)、マレーシア日本国際工科院 (MJIIT)



本事業は、日本とASEAN 諸国が共通課題とするSDGs（持続可能な開発目標）の達成にむけて日ASEAN 共同研究の基盤形成をめざすものです。日ASEAN の大学や研究機関との協力のもと、現場の課題解決を志向する国際共同研究を推進するとともに、民間企業や政策決定者との連携を強化し、次世代の研究者や科学技術イノベーション人材の育成にも取り組んでいます。

環境・エネルギー分野では、再生可能エネルギーの導入にむけ、特に農村部の無電化地域でのバイオマス利用研究と社会影響調査に重点を置き、タイやラオスで試験導入を始めた溶媒改質法（バイオマスからより効率的にエネルギーを取り出す方法）の近隣諸国への適用に加え、光触媒材料や太陽電池材料などに関する共同研究をタイ国立科学技術開発庁などと実施しています。

生物資源・生物多様性分野では、コロナ禍を受けての天然創薬資源の探査、生物多様性保全、木質材料の有効利用、微生物相を利用した木質素材転換、生物学的環境修復に関する研究をインド

ネシア国立研究革新庁などと実施しています。研究成果の社会実装にむけた産学連携をはかる一方、ASEAN 域内の遺伝資源の保全と公正な利益配分にも継続して取り組んでいます。

防災分野では、ASEAN 共通課題である大規模自然災害の早期警戒システム構築にむけて先端的な技術開発を推進しています。具体的には、降雨観測情報を用いた豪雨洪水土砂災害や高潮災害の予測手法の開発、泥炭地の水循環と火災および大気汚染の解析と予測、国際河川であるメコン川の洪水土砂災害・上流ダムの影響、火山噴火や火山泥流に関する予測手法といった研究をASEAN 各国の研究者や行政とともに進めています。

日ASEAN 友好協力50周年である2023年には第12回日アセアン科学技術協力会議（AJCCST-12、6月、ダルサラーム）、日ASEAN イノベーション週間（8月、バンコク）等に参加し日ASEAN の共創のあり方について議論するとともに、関係者間で関連政策や研究資源情報の共有を行いました。

Industry-Academia Collaboration Program

産学連携による協創プログラム

アジア・アフリカ地域研究部局との連携による未来空調コンセプト創出

実施年度 2021–2026

学内協力部局 大学院アジア・アフリカ地域研究研究科ほか

連携機関 ダイキン工業株式会社

担当課題 東南アジア地域における未来空調コンセプトの創出及び事業ロードマップの策定
熱帯・亜熱帯地域の「開放型住居」における新たな建築・空調文化の創出

本研究所は、京都大学とダイキン工業株式会社が2013年度に締結した「組織対応型包括連携協定」にもとづく産学連携・共同研究事業に2021年度より参加しています。これまでの連携協定のもとでは、空間（空気、環境）とエネルギー分野における長期的な未来観測に則ったテーマの創出、イノベーションの実現に向けて工学を中心とした事業が行われていました。しかし、コロナ禍をきっかけに空気や健康といった分野への関心が世界的に高まったことから、Well-beingの実現と教育・啓蒙に資する事業が医学、農学、地域研究の部局が参加するかたちで新たに開始されました。

今後のアジア・アフリカ地域では住民の所得がさらに増え、市場が拡大し、空調機の需要が大幅に高まると予測されます。一方で、高まる電力需要と環境保全との調整や、貧困層を包摂した社会システムの構築など、空調をめぐる地域の課題は多数あります。

本研究所では、2022年度から継続開催している「東南アジアの都市居住」定例研究会が13回を数え、学内外からさまざまな分野の専門家を招き、都市問題について多角的に理解を深めてきました。2024年度にはインドネシアにて第48回東南アジアセミナーを実施し、異なる分野の専門家や現地政府・自治体関係者らと共に、参加者は暑熱環境下のライフスタイルについて議論しました。また、熱帯に暮らす人々の知恵と工夫に焦点を当てた「Thermopolis（サーモポリス）」プロジェクト、持続可能な空調と

住居デザインを提案する建築モデル製作プロジェクトなどを進めてきました。今後、現地政府・自治体やNPO、地域コミュニティと連携してこれらのプロジェクトの社会実装を目指します。

ダイキン工業は、世界市場で大きなシェアを誇る空調機技術をはじめ、さまざまな技術開発に取り組んでいます。このような企業との産学連携は、本研究所にとって新たな試みです。所員がもつ東南アジアの気候、文化、歴史観、国家制度などへの深い理解と地域の行政機関、市民社会組織や住民との直接的な連携を含めた超学際的研究の実践という強みを生かし、従来にない産学連携を創出することが期待されています。



産学共同研究の一環としてインドネシアの省庁、地方自治体、NGO、住宅地を訪問

研究ユニット

Data-oriented Area Studies Unit

京都大学研究連携基盤未踏科学研究ユニット

データサイエンスで切り拓く総合地域研究ユニット(DASU)

<https://ku-dasu.cseas.kyoto-u.ac.jp/>



実施年度 2020-2024

参加部局 東南アジア地域研究研究所、学術情報メディアセンター、大学院情報学研究科、経済研究所、人と社会の未来研究院、人文科学研究所、公共政策大学院、エネルギー理工学研究所、大学院エネルギー科学研究科、大学院医学研究科、大学院農学研究科、フィールド科学教育研究センター

本ユニットは、汎ディシプリンの立場から地域を総体的に理解することを目標とする地域研究と、近年のデータサイエンスの発展のなかで広い学問分野にわたって有用性を発揮するようになった情報学の融合を基盤として、そこに各分野のアプローチを参画させることで現代の社会的課題の理解の再構築を試みる「データ

サイエンスを基盤とする総合地域研究」の展開をめざしています。地域情報学＝知識のデジタル化を通じた共有・統合化の成果を基盤として、国内ないしアジア・太平洋地域における政治・経済・社会の設計に関わるシミュレーション、リスク評価、政策効果評価の課題に取り組んでいます。

各種プロジェクト

グローバル化が進む現在、私たちは環境、経済、政治、社会の多くの課題に直面し、ますます多元化する世界でいかに共存協働しよりよい未来を築いていくのかを問われています。本研究所では、多分野の研究者が東南アジアをはじめとする諸地域で現地社会に密着して調査研究を行っています。以下にその一例を紹介します。

気象・泥炭火災・大気汚染監視アプリ「SIMOCAKAP」 インドネシア熱帯泥炭地における水文気象観測データ統合技術の開発

本研究所は、インドネシアの熱帯泥炭地の開発によって生じた大規模森林火災問題の解決に向けてさまざまな取り組みを行っています。その一環として、これまで蓄積してきた大気環境計測、気象レーダー等の水文気象観測データ等の技術を統合し、気象・泥炭火災・大気汚染監視アプリ「SIMOCAKAP」を開発、地域住民、インドネシア政府やリアウ州の地元大学と連携しながら、双方向の防災情報の発信・共有を目指します。



インドネシア国家研究革新庁関係者や地元大学とブンカリス県知事を訪問（2024年7月）

ブータン国東部タシガン県における 大学-社会連携による地域づくりに関する人材育成開発支援

ブータンの農村部では過疎化とともに離農、保健医療の立ち遅れ、文化の消失などの問題が深刻化しています。本事業は、ブータン王立大学シェラブツェ校に設置されたGNH Community Engagement Centerを拠点に、農業に関する技術指導、基礎医療器具の設置やトレーニングプログラムの実施、民俗資料館開設などの活動を行い、農村の問題に自覚をもって取り組む学生、教員、地域住民の人材育成機能の強化と定着を目指しています。



バルツァム・コミュニティ・ミュージアム開館式（2024年12月）

アチェ津波メモリーグラフ 大規模自然災害被災地における景観変化の記録・共有・継承が果たす役割の研究

本研究所ではカメラアプリ「メモリーグラフ」の技術をインドネシアの津波被災地で応用する研究を実施しています。同一構図撮影を支援する本アプリは、今昔写真や定点観測などに活用されています。被災地の景観の変化を住民主体で記録し、被災と復興の経験を地域を越えて共有し次世代に継承する課題に、インドネシア国立公文書館、シアクアラ大学津波防災研究センターや防災学研究科など現地機関とともに取り組んでいます。

インドネシア・アチェ州にて「アチェ津波メモリーグラフ・コンテスト」を開催（2024年12月）



研究課題	研究代表者	事業年度	種目
エビデンスに基づく計量的地域研究の展開	原 正一郎	2021–25	基盤研究 (A)
低成長期中南米の政党システム変動の比較分析	村上 勇介	2021–24	
包摂的な動物感染症対策をフィリピンで実践するための学際的なワンヘルスアプローチ	山崎 渉	2024–27	
Sovereignty, Capitalization, and Uncertainty: Global Political Economy from the Vantage Points of Four SEA and GMS Borderlands	Decha Tangseefa	2020–24	基盤研究 (B)
地域社会からみる多様な冷戦認識と記憶の検証：西太平洋地域を中心に	貴志 俊彦	2021–24	
東南アジア経済論を目指したタイ・半島諸国の比較制度分析：要素配分構造と長期成長	三重野 文晴	2021–24	
ブータンに暮らす高齢者の健康を守るための創造型地域研究	坂本 龍太	2021–25	
「インド太平洋」概念の批判的考察：アンダマン・マラッカ海域における海洋秩序の分析	河野 元子	2021–24	
ミャンマーの大学と在地との連携による地域活性化のための国際協働グローバル地域研究	安藤 和雄	2021–24	
ベトナム红河デルタ村落における共同体の再編：生計の多様化と生活の安定化	柳澤 雅之	2021–25	
メコン川流域の環境文学：タイ、カンボジア、ラオスにおける川と信仰	平松 秀樹	2022–26	
東南アジア大陸部越僑コミュニティの基礎研究：ベトナム仏教寺院資料分析から	大野 美紀子	2022–25	
東南アジア農村における経済－社会－環境連関：40 年間の経済成長期を対象とした検証	河野 泰之	2022–24	
Interdisciplinary Analysis of Drug Use and Its State Control in Indonesia	山田 千佳	2022–26	基盤研究 (C)
熱帯泥炭地火災における科学的データの収集と火災リスク評価への応用	甲山 治	2023–25	
インドネシアにおける土地所有権と慣習法	水野 広祐	2024–27	
地域雇用の非正規化と外国人労働力の導入	町北 朋洋	2019–24	
高齢地域住民の健康と農のある暮らしとの関連性の多角的探究	野瀬 光弘	2020–24	
海域東南アジア山地民のイスラム化に関する基礎研究：「山地－平地」関係理解にむけて	石川 登	2021–24	
フィールドの共創的な再現：差異と類似をめぐる教育実践から構築する公共的な人類学	飯塚 宜子	2021–24	
冷戦期アジア財団の国際反共戦略とアジアにおける華僑華人研究助成	小泉 順子	2021–24	
微細な地形が無脊椎動物の浮遊幼生および着底個体へ及ぼす影響の解明	澤田 英樹	2021–24	
The Making of Modern Siamese-Burmese Boundaries: The Ethnographic Factor	Pavin Chachavalpongpun	2022–24	
簡易・安価・高感度なアフリカ豚熱オンサイト診断システムの開発	山崎 安子	2022–24	挑戦的研究 (萌芽)
毒草の命名法：植物名に表れる人間の身体部位表現に着目して	西本 希呼	2023–25	
Japanese Intellectual Knowledge Formation in Multidisciplinary Research within Southeast Asian Area Studies	Mario Lopez	2023–25	
シャム・イギリス修好通商条約（1855 年）研究の新段階：東アジア的契機に着目して	小泉 順子	2024–26	
パフォーマンスによるフィールドの共創的再現：人類学的教育実践の協働と展開	飯塚 宜子	2024–26	
生息域内外の小型鯨類を対象としたテロメアによる慢性ストレス評価の試み	木村 里子	2024–26	
高齢者終末期ケアにおける鎮静と人工的水分・栄養補給に関する縦断研究	和田 泰三	2024–27	
タイ国第三期高齢政策のもとでのケアと老いの様態：生産と積徳、自律と依存のはざま	速水 洋子	2024–27	
東南アジアの国際観光地における感染症情報の提供と可視化に関する地域間比較	吉川 みな子	2024–26	
東南アジア地域研究のコアジャーナルを共有する機関横断型プラットフォーム構築の研究	木谷 公哉	2024–26	
文学を通じた東南アジアにおける環境問題解決の試み	平松 秀樹	2022–24	若手研究
「レジリエンスの高い家族」：災害時の情報共有が家族内関係に及ぼす影響の研究	西 芳実	2022–24	
Financing 'Carbon Lock-in': The Role of Japanese Investment in Philippine Energy Transition	Julie Ann Delos Reyes	2020–24	
外国人労働者の受け入れにおける文化的差別についての実証研究	翟 亜蕾	2021–24	研究活動ス タート支援
From 'Creative Destruction' to 'Creative Development' in the Popular Living Heritage Sites in Asia	Sabine Choshen	2021–24	
18 世紀前半の露清貿易形成とヨーロッパ経由の清の情報に関する研究	中村 朋美	2022–26	
ミンダナオ民衆の個人史から再考する 20 世紀：草の根保守層の形成に関する調査	土屋 喜生	2023–25	国際共同研 究加速基金 (国際共同研 究強化 (B))
A One-Health Metagenomic Study of Viruses at Indonesia's Threatened Human-nature Interface	Youdiil Ophinni	2024–25	
Minorities (dis)Engagement in the Majority-led Social Movements: A Relational Approach towards Understanding the Perception of "Nation Consciousness" among Ethnoreligious Minorities in the Middle East	Mostafa Khalili	2024–26	
Bridging Economic Demands with Social Responsibility: A Deep Dive into SMFDI's Production-Driven CSR Initiatives	Wu Yunxi	2024–25	特別研究 員奨励費
Gender Representation of Working Professionals in Japanese TV Commercials: A Temporal Analysis from the End of the 20th Century to the Early 21st Century	Urszula Frey	2024–26	
Understanding Ethnonationalistic Conflict and its Transnational Spillover from an Anthropological Perspective	Mostafa Khalili	2023–24	
インドネシア熱帯泥炭地における災害および水文・気象情報管理システムの構築	甲山 治	2019–24	特別研究 員奨励費
ウォーレス・パプア域の沈香：種の分布・成分・遺伝資源保全の共同研究	山田 勇	2020–25	
環境ガバナンス構築過程の実証研究：南米の麻薬代替作物化の事例	村上 勇介	2021–24	
ベトナムにおけるアフリカ豚熱の実践的な高感度診断法の開発と環境動態の解明	山崎 渉	2022–26	特別研究 員奨励費
現代ラテンアメリカにおける先住民の「複数拠点生活」	大橋 麻里子	2022–24	
東南アジア国境地帯におけるロヒンギャ難民の家族生活の実行と再生に関する研究	Miriam Jaehn	2022–24	
中央アジアにおけるソヴィエト性の再考：伝統的規範の継承と変容の視点から	Mirlan Bektursunov	2024–25	特別研究 員奨励費
絨毯織りから見るウズベク牧畜民の「伝統」と生活文化	志田 夏美	2022–24	
台湾に移住したインドネシア華僑の自己表象実践の動態：社会統合政策の変遷の中で	柴山 元	2022–24	
現代フィリピンにおける民主化のパラドックスと暴力的ポリシング	瀬名波 栄志	2022–24	特別研究 員奨励費
ベトナムの小農による持続可能な地域生活の構築：オンライン時代の生業戦略を事例に	皆木 香渚子	2023–24	

Publications

出版



<https://edit.cseas.kyoto-u.ac.jp/ja/>

出版

研究叢書

本研究所では現在 5 つの研究叢書を刊行しています。創刊当初は所員の研究成果公開の場でしたが、和文の「地域研究叢書」をはじめ、2000 年以降、広く一般からの公募も受け付けています。

シリーズ名	言語	創刊年	既刊冊数	出版社
地域研究叢書	日	1996	47	京都大学学術出版会
Monographs of the Center for Southeast Asian Studies	英	1966	21	University of Hawai'i Press
Kyoto Area Studies on Asia	英	1999	30	京都大学学術出版会および Trans Pacific Press
Kyoto CSEAS Series on Asian Studies	英	2009	24	京都大学学術出版会および NUS Press
Kyoto CSEAS Series on Philippine Studies	英	2019	3	京都大学学術出版会および Ateneo de Manila University Press

地域研究叢書



焼畑を活かす 土地利用の地理学
ラオス山村の 70 年
中辻享、2025 年

「景観モザイク」のなかには優れた多様性がひそんでいる。一元的な制度を押しつける国家政策の影響や換金作物の導入に揺れ動きながらも柔軟に変化する農民らの生活を、微細な環境の差異に着目し、航空写真や衛星写真も利用しながら実証的に確認する。1940 年代以降の 70 年の土地利用を見渡しながら、焼畑民の営みを明らかにした画期的成果。

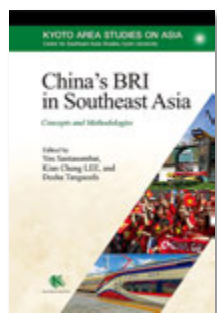


ポピュラー音楽と現代政治
インドネシア 自立と依存の文化実践
金悠進、2023 年

音楽と政治の関係は古くて新しい。しかしインドネシアほど生々しく音楽と政治が絡み合い歴史が作られてきた国はない。スカルノによる西洋音楽批判、スハルト権威主義体制による音楽統制と音楽家動員。それへの音楽家の抵抗や音楽創造実践。民主化後、反権力を掲げる音楽実践者が政府批判を繰り広げれば、他方で著名歌手が政界に続々と進出して権力を掌握するなど、音楽と政治の関係はより複雑化した。2019 年音楽実践法案の顛末を軸に、インドネシア、さらには現代東南アジア政治を見る。

第 18 回 榎山純三賞
第 2 回 音楽本大賞個人賞
第 14 回 地域研究コンソーシアム賞登壇賞

Kyoto Area Studies on Asia



China's BRI in Southeast Asia: Concepts and Methodologies
Yos Santasombat, Kian Cheng Lee, and Decha Tangseefa, eds., Forthcoming 2025

本書では中国の「一帯一路構想 (BRI)」が東南アジア諸国の社会経済および文化的なミクロな現実に対して及ぼす力学と影響を分析する。鉄道、経済特区、港湾等のインフラ開発は貿易、産業、金融の分野で ASEAN 諸国に新たな機会を生み出す一方、地域社会、国家主権、世界経済の秩序、国際的な法的枠組みに深刻かつ根本的な課題を及ぼす。民族誌的手法も駆使しながら、様々な観点から BRI が東南アジア諸国にもたらす影響を検証する。



Money-lending Contracts in Konbaung Burma: Another Interpretation of an Early Modern Society in Southeast Asia
Teruko Saito, 2024

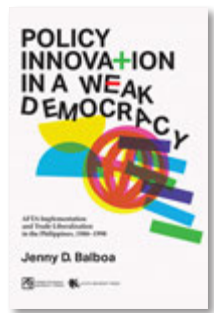
18～19 世紀のビルマ王朝社会では、様々な契約証文が人々の間で交わされていた。特に借金証文は当時の社会経済状況を示す貴重な資料である。著者は 3 千を超える現地の史料を読み解き、借金をめぐる紛争や柔軟な民事裁判制度、生活の知恵など近世ビルマの庶民の生活の具体的な浮き沈みを生き生きと映し出す。本書はビルマを事例として、これまでほとんど未開拓であった資料をもとに近世東南アジア研究の可能性を実証的に示す試みであり、従来の歴史観を覆す新たなイメージを提示している。

Kyoto CSEAS Series on Philippine Studies



Packaged Food, Packaged Life: Corporate Food in Metro Manila Slums
Heriberto Ruiz Tafuya, 2023

マニラのスラム街では、小袋や瓶に包装された何十種類もの企業ブランド食品が売られている。従来の研究は所得増加やライフスタイルの多様化がそれらの消費を促したと説明するが、実際は劣悪な都市環境による食品汚染への対策として人々はそれらを選んできた。つまり人が生き抜くための実践の結果だと本書は主張する。企業への依存は必要ない。しかし国や市民組織がパッケージ食品を生産し人々がそれを使うなら、危険な近代化から抜け出す道ともなり得る。都市貧困層出身の実体験の上に立つ画期的研究。



Policy Innovation in a Weak Democracy: AFTA Implementation and Trade Liberalization in the Philippines, 1986-1998
Jenny D. Balboa, 2022

長い植民地主義から独立したが故に、フィリピンはナショナリズムに根ざす強い保護主義的傾向と脆弱な政治経済をもつ発展途上国であった。しかしピープルパワー革命により発足した民主政権は注目すべき貿易改革を実行し、過去に数々の不正な条件が課せられてきたこの国の貿易自由化を実現した。なぜそれは可能だったのか？本書は脱植民地主義のもとでの国際化と新しい開かれた地域主義への道に大きな示唆を与えるフィリピンの経験を活写する。

学術誌

本研究所では現在2つの学術誌を刊行しています。1963年の東南アジア研究センター設立当初より、『東南アジア研究』は日・英による季刊学術誌として、自然科学、社会科学、人文学にわたる多様な分野の論考を掲載し、最先端の問題提起を行ってきました。2012年、英文誌 *Southeast Asian Studies* の創刊を受けて、『東南アジア研究』は年2回刊行の和文誌に移行し、現在に至ります。両誌ウェブサイトでは、最新号も含めたすべての論考を公開しています。

東南アジア研究（和文）

<https://kyoto-seas.org/ja/>



7月・1月刊行



1963年、日・英による季刊学術誌として創刊。2012年、英文誌 *Southeast Asian Studies* の創刊を受けて年2回刊行の和文誌に移行。創刊以来、レフェリー制度のもと、自然科学、社会科学、人文学にわたる多様な分野の東南アジア地域に関する論考を掲載してきました。本誌は、現地で収集したオリジナルの史資料に基づいた研究とともに、地域間比較ならびに俯瞰的・総合的研究を重視し、特に自然科学分野や生態学的視点を包摂する点に、他誌にない独自性があります。その特色は、単独の論考だけでなく、テーマ特集号にも如実に現れています。本誌ウェブサイトでは最新号も含めたすべての論考を公開しており、今後もそれぞれの地域社会に根ざした最先端の問題提起を積極的に発信していきたいと考えています。

Southeast Asian Studies（英文）

<https://englishkyoto-seas.org/>



4月・8月・12月刊行



東南アジア地域研究に関する最新の優れた研究成果を公表し、国内外の研究者の対話と共働の場となることをめざして創刊されました。東南アジア地域内の事象や話題について広く深く掘り下げた議論をととして、地域の内在的理解を深める一方で、俯瞰的・総合的な研究をととした東南アジアの全体像の解明をめざしています。人文学・社会科学・自然科学の各分野からの多様なアプローチによる論考を掲載し、論文、書評などによる通常号以外にも、年に1号程度、特集号の刊行や小特集の掲載を行っています。本誌ウェブサイトでは、最新号も含めたすべての論考を公開しています。(Scopus、Emerging Sources Citation Index 収録)

多言語オンラインジャーナル

<https://kyotoreview.org/>



オンラインジャーナル *Kyoto Review of Southeast Asia* は、東南アジアにおける知的交流の促進を目的とした公開討論の場です。本研究所のグローバルなネットワークを通じて集めた研究論文や書評をオンライン上で迅速に公開することにより、東南アジア全域で最新の知的潮流を共有することをめざしています。執筆者は研究者や NGO/NPO 関係者、ジャーナリストなど多岐にわたり、文化事業や情報生産に携わる人々をつなぎ、持続的な関係を育むことも目指しています。毎号異なるテーマで特集を組んで論文を掲載するとともに、主として東南アジア地域で出版された現地語書籍の書評を掲載しています。また、より多くの読者に利用してもらえるよう、特集記事は英文だけでなく日本語、タイ語、インドネシア語、フィリピン語、ベトナム語、ミャンマー語に翻訳して多言語で提供しています。さらに月刊の連載コラム「トレンドセッター (Trendsetters)」では若手研究者が論文を発信する機会も提供しています。



ワーキングペーパー

<https://edit.cseas.kyoto-u.ac.jp/ja/kyoto-working-papers-on-area-studies/>

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、アフリカ地域研究資料センター、本研究所が共同で出版する *Kyoto Working Papers on Area Studies* シリーズ。3部局に所属する教員、若手研究者、大学院生などのオリジナルな研究成果を発表する場となっています。



CSEASクラシックス

<https://cseas-classics.cseas.kyoto-u.ac.jp/>

本研究所では、旧東南アジア研究センターの所員による研究成果のうち、無料公開が許された学術書や論文を掲載するウェブサイト を 2020 年に立ち上げました。現在は、2020 年 6 月に解散した創文社による「東南アジア研究叢書」から 9 冊、Discussion Paper から 19 冊を公開しています。1970 ～ 90 年代に発表されたこれらの研究をダウンロードして、あらためて手に取っていただけることを願っています。



ディスカッションペーパー

<http://hdl.handle.net/2433/228746>

ディスカッションペーパーは主に共同利用・共同研究拠点「地域情報資源の共有化と相關型地域研究の推進拠点 (CIRAS)」(2017–2021 年度) による共同研究の成果を公開することを目的に刊行されました。本シリーズでは論文のみならず、現地調査報告、資料、文献解題、ワークショップやシンポジウムの記録など多彩な研究成果を公開してきました。使用する言語も英語、日本語だけでなく、マレー語やスペイン語、ベトナム語など様々です。CIRAS としての活動は 2022 年 3 月末をもって終了しましたが、これまでに 117 号が刊行され、ほぼすべてが PDF で公開されています。



教員の出版物



現代ペルーの政治危機 揺れる民主主義と構造問題
(アジア環太平洋研究叢書 7)

村上勇介 編

国際書院、2024 年

90 年代のフジモリ政権期を経た 21 世紀のペルー政治をその根幹である国家 – 社会関係、地方分権化に焦点をあてて分析し、今後のゆくえを展望する。「現代ペルー政治の今日的位相」「現代ペルーの政治社会構造：変化と不変」「21 世紀のペルー政治：脆弱な政党、小党分裂化、アウトサイダーの再登場と混迷」「新自由主義レジームと地方分権化の中での社会紛争の政治」「中途半端な地方分権化」「地方の叛乱」の余波：1930 年代初頭における制度

改革を通じた中央・地方関係再編の試みとその限界」「2022 年末以降の政治危機の中で顕在化した構造的問題」の 7 つの論考を収める。



中央ユーラシアの女性・結婚・家庭
歴史から現在をみる (アジア環太平洋研究叢書 6)

磯貝真澄・帯谷知可 編

国際書院、2023 年

共同利用・共同研究拠点「地域情報資源の共有化と相關型地域研究の推進拠点」および東北大学東北アジア研究センターの共同研究の成果。中央ユーラシアのチュルク系ムスリムに焦点をあて、女性・結婚・家庭を分析し共通の現象を動態的に探るための考察材料を提供し、歴史から現在をみることを試みる。1～3 章では 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての中央ユーラシアと中東地域の知識人らのつながりをムスリム女性をめぐる議論を軸に掘り起こした。4～5 章では文化人類学的な視点から中央アジアの現代の結婚をめぐる重要な事象を近現代史的文脈を踏まえて分析している。ウズベキスタンの女性雑誌の記事目録を収録。



Vulnerability and Transformation of Indonesian Peatlands

Kosuke Mizuno, Osamu Kozan, Haris Gunawan (eds)

Springer Singapore, 2023

総合地球環境学研究所実践プロジェクトの成果全 4 巻の第 1 巻。インドネシアの泥炭地生態系と社会との関係を、脆弱性、回復力、適応力の概念を用いて理解し再修復するための統合的アプローチを紹介する。本書前半部では泥炭地開発で失われつつある生態系や土地所有が曖昧であることで生じる泥炭地社会の脆弱性を報告した。後半部では現在地域住民と行っている様々な泥炭地修復活動や社会実装を見据えた学術研究を紹介し、今日の劣化した泥炭地における回復力、適応力、変容の可能性を示した。



Local Governance of Peatland Restoration in Riau, Indonesia: A Transdisciplinary Analysis

Masaaki Okamoto et al. (eds)

Springer Singapore, 2023

「熱帯泥炭地域社会再生に向けた国際的研究ハブの構築と未来可能性への地域将来像の提案」プロジェクト 3 冊目の研究成果。東南アジアでも最も広範に熱帯泥炭地が広がるインドネシア・リアウ州に着目し、ローカルレベルでの泥炭地をめぐるポリティクス、泥炭社会に住む人々の泥炭地への認識、彼らの生業などを学際的に分析した。本書では主に一つの村を分析対象とし、NGO 活動家による社会実装に伴う複眼的な研究を行い、泥炭地保全政策で忘れられがちな河川の生態系の把握の必要性和淡水漁業の活性化を通じた泥炭保全実践の可能性を指摘した。

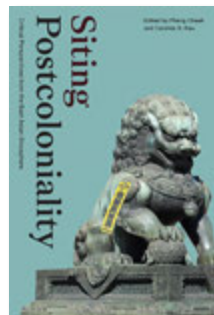


Indonesia at the Crossroads: Transformation and Challenges

Okamoto Masaaki and Jafar Suryomenggolo (eds)

Trans Pacific Press & Gadjah Mada University Press, 2023

1998年のスハルト独裁体制崩壊以降の民主化は国家としてのインドネシアを根本的に変容させ、2020年現在、約2億7000万の人口を擁する世界第3位の民主主義国家となった。本書では、改革開放政策が国の構造をどのように変え、国民の生活にどのような影響を与えたか、経済はどの程度発展したか、国民が相対的な自由を手に入れた一方で依然としてどのような問題が存在するか等変革の成果と課題をアジアの様々な分野の研究者、専門家、NGO関係者が12の章で分析した。



Siting Postcoloniality: Critical Perspectives from the East Asian Sinosphere

Pheng Cheah and Caroline S. Hau (eds)

Duke University Press, 2022

本書は中国から多大な影響を受けてきた中華圏として東アジアと東南アジアを取り上げ、ポストコロニアル概念を再検討する。中華圏では帝国主義の歴史が欧米帝国主義より長期的かつ複合的であり、中心-周辺、植民地支配-被支配、先進国-途上国という従来の二元論ではその実像を捉えきれない。ソ連の文化的覇権からの脱却を試みた中国社会主義、日本帝国主義の遺産と向き合う台湾、東南アジア・南アジアのディアスポラが経験した植民地主義、さらに英国、日本、中国の支配という香港の複雑な植民地経験等の検討を通じた理論の再構築を促す。



情報・通信・メディアの歴史を考える

《いまを知る、現代を考える 山川歴史講座》

貴志俊彦・石橋悠人・石井香江 編

山川出版社、2023年

2018年、高校の学習指導要領の改訂により、歴史の教科に必修科目「歴史総合」と選択科目「世界史探究」「日本史探究」の3科目が導入された。本書は高大連携のもと刊行が始まったシリーズの一書。情報・通信・メディアの歴史を考えることは、産業や技術の発展だけでなく、情報の役割や影響を歴史的な出来事に結びつけて解析することができる点で重要である。情報や通信技術は、社会や文化の変化を促し、歴史の転換点を生み出す要因となるからであり、本書では通信技術を通して日本と世界との関係に注目し、情報や通信の歴史的意義を見ようとする。

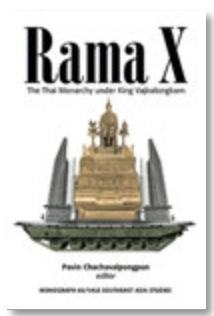


四国山地から世界をみる ゴミアの地球環境学

内藤直樹・石川登 編

昭和堂、2024年

本書では、過疎化がすすむ四国山地の山村に生きる人びとがその環境に身をおいてきた理由を〈当事者の目線〉から描きなおそうとする。本書の副題にある〈ゴミア〉とは、ヒマラヤから東南アジア・中国にひろがる山地に分布する独自の文化、社会、生態環境をもつ自治の空間であり、本書は東南アジア地域研究の視点を援用することで、四国山地の山村を〈ゴミア的空間〉の一つとしてとらえている。多分野の研究者により地域を文理融合的視点で複眼的・重層的に捉えなおす視点や方法論を提示しながら、近現代以降の国家や社会体制、経済、科学技術の変化とともに、日本の山村景観が生じたダイナミズムを明らかにする。



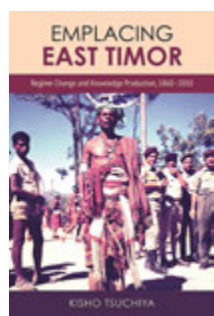
Rama X: The Thai Monarchy under King Vajiralongkorn

Yale Southeast Asia Studies Monograph #69

Pavin Chachavalpongpun (ed)

Yale University Southeast Asia Studies, 2024

プーミポン国王(1946-2016)の死去によりタイの君主政では権力の空白が生じた。2016年に即位したワチラーロンコーンは、道徳的権威やカリスマ性に欠けるにもかかわらず、君主政の強化を目指しその空白を埋めようとした。本書では、ワチラーロンコーンが父プーミポンとは異なる方法で自らの権力を強化しようとした点に注目している。親王政機関は自らの利益のためワチラーロンコーンとの関係を調整し、それによって君主政の変質を後押しした。一方、ワチラーロンコーンの権力拡大に対し、若い世代は不敬罪法に抵触する可能性を知りながらも過度に保護されてきた王政の改革を果敢にも要求した。岐路に立つタイの王政はこの民意に抵抗し改革の要求を無視しており、王政の未来は依然として見通すことができないままである。



Emplacing East Timor: Regime Change and Knowledge Production, 1860-2010

Kisho Tsuchiya

University of Hawai'i Press, 2024

本書の目的は、暴力による政権交代のサイクルと知識生産の関係性を明らかにするとともに1860年代～2010年代における新たなティモール島の歴史認識を確立することである。従来の歴史認識は戦争→政権交代→平定という歴史のサイクル、島内に国境が引かれた島であるという特異な条件、外国人知識生産者の比較優位という3つの長期的要因によって方向付けられ、この構造の中でティモール人や外国人の地政学的、組織的、個人的な関心や想像力が(東)ティモールのナショナリズムとして展開されてきた。著者は学術書、旅行記、秘密文書、政策、儀式や式典、革命歌、博物館等、多数のジャンルと言語にまたがる膨大な史料を紹介しつつ、これまで着目されてこなかった(東)ティモール論の系譜を明らかにし、(東)ティモール史と東ティモールナショナリズム論のミッシングリンクを埋めようとする。



カンボジアは変わったのか 「体制移行」の長期観察 1993～2023

小林知 編著

めこん、2024年

1993年、カンボジアでは内戦が終結し、統一選挙が実施された。そこから30年。日本をはじめ国際社会が後押しした民主化はカンボジアの人びとに何をもたらしたのか。戦火が止み、社会が安定し、経済活動が活発化する一方、広大な面積の森林が消え、豊かだった漁業環境も大きく変化した。貨幣経済が深く浸透し、農村人口の出稼ぎが増加した。本書では「体制移行」後のカンボジアの自然環境、

政治経済、社会、文化における変化を現地調査経験をもつ12名の研究者が活写する。「カンボジアは変わったのか」という問いを複数の分野・方向から論じることで、近代化・グローバル化の普遍的特徴を再検討し、また21世紀の東南アジアという地域と世界の文脈の中で、カンボジアが見せる独自の展開を一つの歴史経験の総体として描き出す。



Reconstructing Erpenius' Library: The First Collection of Oriental Manuscripts at Cambridge University Library

Majid Daneshgar

Brill, 2024

本書は、近代初期ヨーロッパで東洋の貴重な写本を集めたトーマス・エルベニウスの蔵書に関する初の包括的研究書である。エルベニウスはオランダの著名なアラビア語研究者、東洋学者であり、ライデン大学で初代アラビア語教授を務めた。イスラーム文学やアジア諸言語の豊かな情報源とされるこのコレクションについて、本書では、エルベニウスの生涯と功績、彼の手記やケンブリッジ大学図書館における受容と保存の実態を紹介する。本書は、エルベニウスのコレクションを詳らかにすることにより、ヨーロッパ植民地主義の揺籃期において、初期の東洋学者が東洋の言語や文学の探究に情熱を注いだ姿を浮かび上がらせる。

Library & Information

図書・情報基盤

Library

図書室

<https://library.cseas.kyoto-u.ac.jp/>



図書の収集と公開

本研究所図書室は1965年の開室以来、東南アジアとその関連地域に関わる専門書を中心に収集し、2024年3月現在で約27万点の資料を所蔵しています。そのうち、東南アジア諸言語資料はインドネシア語・タイ語を中心に、ベトナム語、ビルマ語などを含む約10万冊以上を所蔵し、国内でも最大規模のコレクションとなっています。

1983年からはジャカルタとバンコクの連絡事務所を拠点に、東南アジア地域で刊行された資料を組織的に収集してきました。また、京都大学大型コレクション事業や文科省共同利用・共同研究拠点「グローバル共生に向けた東南アジア地域研究の国際共同研究拠点」におけるプログラムを活用して、新聞・雑誌の逐次刊行物や公文書などのマイクロ資料を充実させてきました。

これらの資料の共同利用を通して国内外の研究者の活動を支援するとともに、東南アジア諸国の大学院留学生向けに、図書館や学内電子リソースの利用のための講習を行っています。また、アジア経済研究所図書館・立命館大学図書館と相互利用制度を結び、他機関所属研究者への直接貸出を実施しています。

国内外の大学・研究機関図書館とも積極的に交流し、1986年以降、主に東南アジア諸国から図書館員・文学学研究者を招へい研究員として受け入れてきました。近年では、JSTさくらサイエンス交流事業等を通じて、日本の学術情報基盤環境を視察する短期研修も行っています。また、国内外の東南アジア研究拠点機関と協働し、「東南アジア逐次刊行物データベース」の開発を進めています。

その他の図書室のアウトリーチ活動については、36ページをご覧ください。



図書室本館は1880年代の旧京都織物会社の赤煉瓦建築を転用している
開室時間：月曜日～金曜日 9:00～17:00
Tel: 075-753-7306 Fax: 075-753-7364
E-mail: libinfo@cseas.kyoto-u.ac.jp

本研究所図書室の特別コレクション

■石井米雄コレクション

故石井米雄京都大学名誉教授の旧蔵書約1万冊。東南アジア史、上座仏教研究のバイオニア的な業績を残した同氏の足跡を物語るコレクション。タイの伝統法、王朝年代記・碑文資料や東南アジア・日本（琉球・沖縄）史料のほか、地域研究とは一見無縁にみえるようなラテン語版から時代の異なる邦訳版の聖書や言語学関係の文献が含まれる。

■チャラット・コレクション

タイ政府関係者、故チャラット (Charas Pikul) 氏の旧蔵書約9,000冊。うち約4,000冊は葬式頒布本 (Nang Sue Ngan Sop) という重要人物の葬儀に際して配付される記念出版物で、タイ国外では最大規模のユニークなコレクションである。

■フォロンダ・コレクション

高名なフィリピン史学者、故フォロンダ (Marcelino Foronda) 教授の旧蔵書約7,000冊。イロコス地方資料やマルコス政権下の禁書・地下出版物などフィリピン研究の重要資料が含まれる。

■オカンボ・コレクション

フィリピン史学者・作家オカンボ (Ambeth Ocampo) 氏旧蔵書約1,000冊。19世紀後半から20世紀初フィリピン史関係図書やカトリック祈祷書、議会記録などの政府刊行物が含まれる。

■インドネシア・イスラームコレクション

2001年以降収集を始めた現代インドネシアにおけるイスラーム関係出版物約2,000冊。

■その他

マイクロ資料として、東南アジア各国で刊行された新聞・雑誌を集成した「戦後東南アジア新聞・週刊誌基礎資料コレクション」(全14タイトル)、アメリカ国立公文書館所蔵資料を集成した「戦後を中心とする東南アジア各国の国内事情・外交事情文書」(全15タイトル)など植民地期から第二次大戦後までの東南アジア地域研究の基礎資料を数多く所蔵している。



第二次世界大戦期タイの日刊紙
The Siam Rashtra Daily News (1934年)。京都大学貴重資料デジタルアーカイブで公開されている。
<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp>



19世紀フィリピンで出版された楽譜「Viage de novios: tanda de valse」(por T. Araullo)

Map & Documents Room

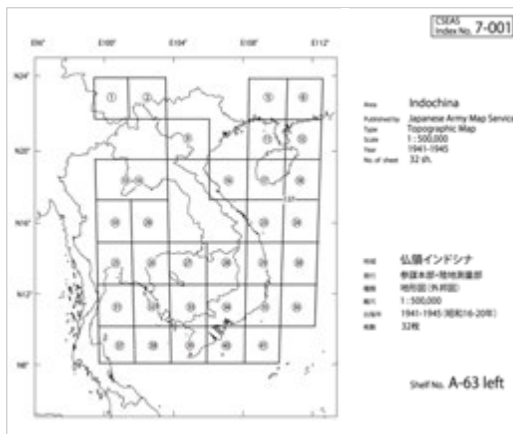
地図・資料室

<https://map.cseas.kyoto-u.ac.jp/>



地図・航空写真などの資料の所蔵と公開

地図・資料室は、東南アジア地域を中心とした地図資料を主に所蔵し、その多くを一般に広く公開しています。資料は、各種地図約48,000枚、航空写真約1万枚、2000年にハワイ大学East-West Centerから移管された人類生態研究ファイル（Human Ecology File）などからなります。なかでも地図は、人間活動－社会－環境の影響関係と相互作用を研究する際に、分野を問わず基礎となる研究資源です。地図・資料室は、貴重な価値をもつ資料の共有化を広く進めるべきという信念のもと、資料のデジタル化にもとづく新しい利用方法も追究しています。



オンラインでの地図目録検索の画面（左は標定図、右は地図のサムネイル画像）



Information Processing Office

情報処理室

<https://info.cseas.kyoto-u.ac.jp/>



ICTの利活用による情報基盤の整備と研究推進

本研究所では、東南アジアを中心に関連する地域の研究機関・研究者と連携・協働して多くの共同プロジェクトを実施しています。情報処理室はICTの積極的な利活用を推進することで、所内情報基盤の整備・管理運用にとどまらず、研究活動への参画や国内外のフィールドでの新たな基盤構築などに取り組んでいます。

統合型クラウドサービス Google Workspace for Education、コンテンツ管理型ウェブシステム WordPress を基軸に、組織的なコミュニケーション、情報収集・発信および保存における情報基盤システムの構築・提供を一手に担っています。また、新型コロナウイルスの感染拡大以降、ハイブリッド形式を含む遠隔会議システムを積極的に導入支援しています。さらに2024年度より同時通訳システム「オンヤク」を導入し、外国人教員の積極的な会議参加に寄与しています。



同時通訳システム「オンヤク」を使用した会議風景

社会貢献

情報処理室では、本研究所で利活用する情報サービスやシステムに関連したコミュニティ活動を下記のように支援しています。

- ・WordPress に関するイベント「WordCamp Japan 2021」の実行委員としてオープンソース・コミュニティに貢献
- ・Gmail、Chrome など多数の Google プロダクトエキスパートとして、それらのコミュニティを先導し、その活動を通じて同サービスの発展に寄与
- ・WordPress 公式プラグイン開発者として、「WP Add Mime Types」（5万を超える利用サイト）など、複数のプラグインを公開・提供



WordCamp Japan 2021 のオンラインイベントステージ（oVice を使用）

Academic Community 学術コミュニティ連携

Japan Consortium for Area Studies 地域研究コンソーシアム (JCAS)

<http://www.jcas.jp/>

加盟組織 107 組織 (2025 年 1 月現在)

幹事組織 10 組織 (第 11 期 (2024 ~ 25 年度))

京都大学東南アジア地域研究研究所、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学東北アジア研究センター、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、上智大学アジア文化研究所、愛知大学国際中国学研究センター、人間文化研究機構国立民族学博物館、東南アジア学会、日本マレーシア学会、NPO 法人平和環境もやいネット



地域研究コンソーシアム (JCAS) は、世界諸地域の研究に関わる研究・教育組織や学協会、民間組織などからなる新しい型の組織連携です。多くの大学や研究機関に散らばっていた地域研究の組織や研究者の団体をつなぎ、組織の枠を超えた情報交換や研究活動を進めるため、2004 年に発足しました。2025 年 1 月現在、107 の組織が加盟する地域研究の学術コミュニティとなっています。加盟組織のうち 10 の組織が幹事組織となり、理事会と運営委員会を組織して JCAS の活動を行っています。本研究所は幹事組織のひとつとして運営を支えており、また、2024 ~ 2025 年度は本研究所に事務局が置かれています。

毎年 4 月に公募が行われる地域研究コンソーシアム賞 (JCAS 賞) は、JCAS 加盟組織への所属を問わず、自薦または他薦による候補をもとに選考が行われ、地域研究のすぐれた作品・企画・活動を顕彰しています。毎年 11 月頃に実施する年次集会では、加盟組織が一堂に会して、JCAS 賞の授賞式・受賞記念講演や一般公開シンポジウムが行われています。また、分野・地域・組織の枠を超えた研究成果発表の媒体である学術誌『地域研究』をオンライン・ジャーナルとして刊行しています。2022 年度からはレクチャー動画の配信とオンラインの討論を組み合わせた「地域の総合知」シンポジウム・シリーズを開始しました。

近年の JCAS 年次集会・一般公開シンポジウム

開催日	開催地	シンポジウムテーマ
2024 年 11 月 30 日	京都 (京都大学東南アジア地域研究研究所) *	地域研究の学術的貢献を活かす制度を考える
2023 年 11 月 18 日	東京 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) *	いま、地域から「豊かな食」と「つながり」を考える
2022 年 11 月 19 日	岐阜 (岐阜女子大学) *	日本と南アジアの新時代～「グローバル」視点による岐阜からの発信～
2021 年 10 月 30 日	オンライン開催	地域研究とグローバル・アジェンダー「濃い研究」のもたらす視座ー
2020 年 11 月 21 日	オンライン開催	アクションとしての地域研究とグローバル・スタディーズー学び、伝え、支え合う
2019 年 11 月 2 日	大阪 (国立民族学博物館)	グローバル化時代の文化力ー〈地域知〉のマネージメント
2018 年 11 月 1 ~ 2 日	大阪 (大阪大学)	「地域」との共創：新たな「地域」研究の可能性ー日本、雲南、モンゴルの取り組みを中心にー
2017 年 10 月 28 ~ 29 日	仙台 (東北大学川内キャンパス)	フューチャー・アースと地域研究者の協力の可能性

* オンラインとのハイブリッド開催



JCAS 賞授賞式後の受賞者らによる記念写真
(上：2023 年 11 月 18 日、左：2024 年 11 月 30 日)

アジアにおける東南アジア研究コンソーシアム (SEASIA)

<https://seasia-consortium.org/>



アジアにおける東南アジア研究コンソーシアム (Consortium for Southeast Asian Studies in Asia, SEASIA) は、2013 年 10 月に東アジアと東南アジアの主要な 10 地域研究機関により設立されました。本研究所は初代事務局として SEASIA の設立に尽力し、2022 年より再び事務局を務めています。現在まで理事会や国際会議実行委員会のメンバーとしてコンソーシアムの運営に携わり、教育と研究を通じて東南アジア地域の理解に貢献するという、SEASIA 共通理念の普及と推進のために尽力しています。

SEASIA の主な取り組みとして、隔年で実施される SEASIA 国際会議は 2015 年の京都会議を皮切りに、2024 年までに 5 回の会議が開催されました。また、2016 年と 2023 年には若手研究者を対象とした国際会議 (東南アジア若手研究者アジア会議 (AYSEA)) が開催されました。コロナ禍中は、オンラインウェビナーとして若手研究者によるトークイベントを開催し、密度の濃い議論と対話の場を提供することにより学術交流を続けてきました。

第 5 回 SEASIA 国際会議は、2024 年 7 月 18 日から 20 日にかけて、フィリピン大学ディリマン校にて開催されました。「De/Centering Southeast Asia」というテーマのもと、世界 25 カ国以上、研究分野も経歴も多岐にわたる 400 名を超える参加者が集まり、東南アジア地域の主体的な視点に基づいた、東南アジアに関する知識の生産と実践のために活発な議論が交わされました。

次回、第 6 回 SEASIA 国際会議はシンガポールの南洋理工大学にて 2026 年に開催される予定です。

ネットワークマップ (30–31 ページ) にて SEASIA 加盟機関をご覧ください。



上：2024 年 SEASIA 理事会
左：2024 年 SEASIA 国際会議
開会式
下：同会議でのパネル報告



学術
コミュニティ
連携

SEASIA 国際会議

	開催日	開催地	タイトル
第 5 回	2024 年 7 月 18 日～20 日	マニラ (フィリピン大学ディリマン校)	SEASIA 2024 Conference: De/Centering Southeast Asia
第 4 回	2022 年 6 月 9 日～11 日	ジャカルタ (国立研究革新庁、ル・メリディアン ジャカルタ)	SEASIA 2022 Conference: Managing Disruption, Developing Resilience for a Better Southeast Asia
第 3 回	2019 年 12 月 5 日～7 日	台北 (台湾中央研究院)	SEASIA 2019 Conference: Change and Resistance: Future Directions of Southeast Asia
第 2 回	2017 年 12 月 16 日～17 日	バンコク (チュラーロンコーン大学)	SEASIA 2017 Conference: Unity in Diversity: Transgressive Southeast Asia
第 1 回	2015 年 12 月 12 日～13 日	京都 (国立京都国際会館)	SEASIA 2015 Conference

東南アジア若手研究者アジア会議 (AYSEA)

	開催日	開催地	タイトル
第 2 回	2023 年 9 月 11 日～13 日	台北 (台湾中央研究院民族学研究所)	AYSEA 2023: The Future Directions of Southeast Asian Studies in the Post-Pandemic Era
第 1 回	2016 年 11 月 9 日～12 日	台北 (国立政治大学)	AYSEA 2016: Democratization, Regionalization and Globalization in Southeast Asia



Global Network グローバルな学術交流

Memorandum of Understanding 学術交流協定

<https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp/education/mou/>



本研究所は、東南アジア諸国を中心に世界中の大学や研究機関と多くの学術交流協定（MOU, Memorandum of Understanding）を締結しています。大学院アジア・アフリカ地域研究研究科も含めた三者間の協定とすることも少なくありません。これらの協定に基づいて研究者の交流を促し、図書資料や研究論文などの学術情報を交換し、またセミナー、会議、シンポジウムの開催を含めた共同研究を実施しています。

東南アジア諸国の大学・研究所間交流としては、インドネシアのハサヌディン大学のほかフィリピン大学、シンガポール国立大学、ハノイ農業大学などと協定が締結され、長年にわたり共同プロジェクトを通じて活発な研究交流を行っています。タイのプリンス・オブ・ソンクラーク大学理学部との間では共同研究および研究者交流に関する覚書が交わされています。また、ミャンマーとはイェジン農科大学、東南アジア教育大臣機構歴史伝統地域センターと協定を締結し、従来困難であったミャンマーにおける総合地域研究が開始されました。

2023 年度にはカヴィテ州立大学獣医生命学部（フィリピン）、コンケン大学農学部（タイ）との、また 2024 年度にはシアクララ大学防災学研究科（インドネシア）、華僑大学グローバル華僑華人



雲南大学中国西南国境民族研究センターとの学術交流協定署名式（2024 年 11 月 25 日）

研究地域研究所（中国）、インドネシア共和国国立公文書館、ナコンパノム大学大メコン圏研究センター（タイ）、雲南大学中国西南国境民族研究センター（中国）との間で新たに交流協定を締結しました。

ネットワークマップ（30–31 ページ）にて、本研究所との学術交流協定締結機関をご覧ください。

CSEAS Fellowship 外国人学者の招へい

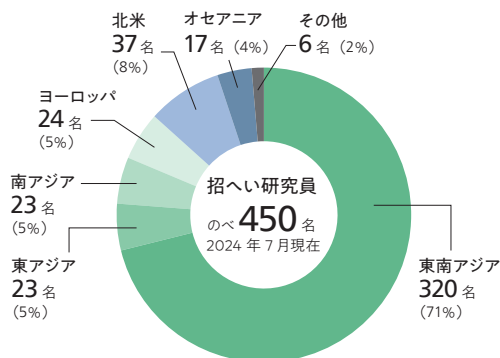
<https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp/education/gaikokujinshohei/>



本研究所では、東南アジアを対象とした研究、および東南アジアとの比較を通じた地域研究を行う研究者を毎年 14 名程度公募し、招へい研究員として受け入れています。本研究所が拠点を担う「グローバル共生に向けた東南アジア地域研究の国際共同研究拠点」もこの客員制度を利用して共同研究プログラムを実施しています。

招へい研究員は、原則として 3 か月から半年までの滞在期間中、本研究所において調査や論文・著書の執筆などを行い、本研究所の所員との協働と交流を進めます。所員の研究関心はさまざまに多岐にわたっているため、招へい研究員は、所員やほかの客員研究員との交流を通して、東南アジアをはじめとする世界の多地域について多面的な研究を行うことができます。また、本研究所の学際的な研究活動にふれることにより、比較研究の視野を広げることにも期待できます。

本研究所が 1975 年に招へい研究員（旧名称は外国人研究員）制度を開始して以来、今日までに 450 人以上の国外の研究者がこの



招へい研究員受入数（国別受入数はネットワークマップ（30–31 ページ）を参照）

制度を利用しており、うち 7 割以上が東南アジア出身者となっています。また、本研究所では招へい研究員以外にも、日本学術振興会の外国人研究者招へい事業（外国人特別研究員）や国内外の助成を受けた研究者なども受け入れています。

Overseas Liaison Offices

海外連絡事務所

<https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp/message/#toc-id7>

本研究所はタイのバンコクとインドネシアのジャカルタに海外連絡事務所を設置しています。バンコク連絡事務所は1963年に開設され、現在はスクンビット地区にあります。ジャカルタ連絡事務所は1970年に南ジャカルタのクバヨラン・バル地区に設置されました。2つの連絡事務所はタイとインドネシアにとどまらない、東南アジア大陸部と島嶼部の全体をカバーする研究活動の拠点です。所員のほか学内他部局や他大学の研究者が駐在員として常駐し、現地語図書、統計、公文書、地図などを毎年継続して収集しています。また、現地の研究者や研究機関と共同研究を推進しています。本研究所が2010年に共同利用・共同研究拠点としての活動を開始してからは駐在者の一部を公募で決定しています。2014年6月に京都大学がバンコクにASEAN拠点を設置して以降は、バンコク連絡事務所も同拠点と連携しながら、東南アジア

Research Exchange

研究交流

本研究所では、学術交流協定や外国人学者の招へい制度も活用しながら、国際会議やセミナーなど各種の研究集会の開催を通じて世界各地の研究者と幅広く意見交換を行っています。

韓国東南アジア学会との合同国際会議を2023年5月に京都で、翌年8月に釜山で開催しました。台湾国立政治大学東南アジア研究所との共催により、2023年7月に京都で、翌年12月に台湾で東南アジアの政治発展に関するワークショップを開催しました。

福岡アジア文化賞大賞受賞を記念して、2023年9月にタイの歴史家トンチャイ・ウィニッチャクン氏（2015年度招へい研究員）の特別講演「Reflections from My Adventure into Thai Legal History（タイ法制史をめぐる冒険を振り返って）」を実施しました。

日ASEAN友好協力50周年となる2023年にはカオ・キムホンASEAN事務総長による京都大学特別講演の開催に尽力、翌年に再びカオ・キムホン氏を京都に招いてASEANの今後、日本と東南アジアとの関係について学生との対話を行う機会としました。

また、客員研究者がおもに登壇する「CSEAS コロキウム」を定期的に開催しています。この他、不定期に開催する「東南トーク」やブックトークなども貴重な意見交換の場となっています。



カオ・キムホンASEAN事務総長特別セミナー（左）、トンチャイ・ウィニッチャクン氏特別講演（右）の案内ポスター

における学術研究ネットワークのハブとして、いっそうの発展をめざして活動しています。

■バンコク連絡事務所

<https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp/message/#toc-id8>

所在地：12CD, GP Grande Tower, 55, Soi 23, Sukhumvit Rd, Klongtoey Nua, Wattana, Bangkok, 10110 THAILAND
電話：+66-2-664-3707
E-mail: bangkok@cseas.kyoto-u.ac.jp



■ジャカルタ連絡事務所

<https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp/message/#toc-id9>

所在地：Jl. Kertanegara No. 38, Kebayoran Baru, Jakarta Selatan, Jakarta 12180, INDONESIA
電話：+62-21-726-2619
E-mail: jakarta@cseas.kyoto-u.ac.jp



2023-24 年度 CSEAS コロキウム（原則第4木曜日開催）

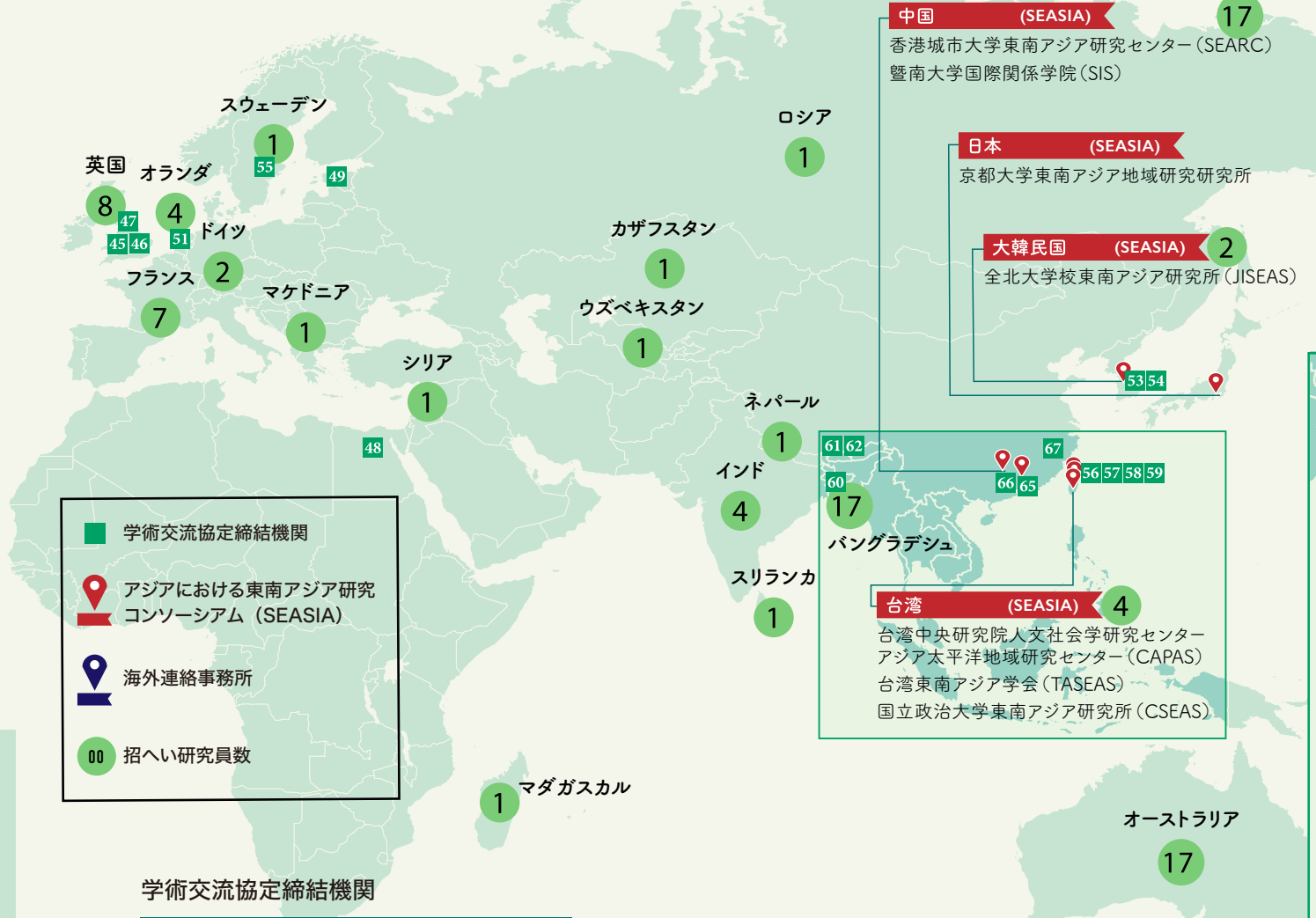
年度	タイトル	発表者
2023	From Partnership to Hegemonic Stalemate? The US-China Relationship in the Early 21st Century	Walden Flores Bello
	Making Gods: A Case Study of the City God Worship in Anxi, China and Singapore	Tong Chee Kiong
	Shifting Plantations in the Borderlands: A Challenge of Chinese Agribusiness in Southeast Asia	Yos Santasombat
	Sovereignty, Sacred Space, and the <i>histoires croisées</i> of Wat Rachathiwat วัดราชสิทธาราม	Lawrence Chua
	An Area Study on Sediment Disasters and Sand Mining Activities in Mt. Merapi Region, Indonesia	Fujita Masaharu
	Ho Chi Minh Cult: An Invention of Tradition	Olga Dror
	Which Lineages? History and Interpretations of Philippine Politics	Mark R. Thompson
2024	Cataloging the Unknown: Exploring the Complexities of Managing Thai Materials in Japan	Songphan Choemprayong
	The First East Asian Economic Miracle: Wages, Living Standards and Foundations of Modern Economic Growth in Southeast Asia, 1880-1938	Jean-Pascal Bassino
	Does Malaysia Need a Pure FPTP System? – Electoral System in Post-Transition Malaysia	Wong Chin Huat
	The Shadow Side of the Rootedness: How Geographic Stability Across Generations Increases Populist, Ethnic Nationalist, Authoritarian, and Chauvinist Attitudes	Andreas Wimmer
	Subsidence: Surfacing Life in a Sinking City	Allan Edward Lumba
	An Authoritarian Security Community in Mainland Southeast Asia: Regional Dynamics in an Actor-centred Theory of Transnational Authoritarianism	Gregory Raymond
	Telling Apart: How Ethnicity Became Political in Early Modern Siam	Matthew Reeder
	Humanitarian Confessions	Philip Fountain
	Networks of Power and Business: Indonesia's Political Economy	Wahyu Prasetyawan



海外から多くの研究者が訪れる本研究所では、外国人学者も交えて親睦を深める場として歓送迎会「Get Together」を毎月開催しています

Global Network Map

ネットワークマップ



学術交流協定締結機関

インドネシア

- 1 ハサヌディン大学研究機構及び大学院プログラム
- 2 シャリフ・ヒダヤットゥラー国立イスラーム大学ジャカルタ校
- 3 チェンデラワシ大学
- 4 スルタン・アグン・ティルタヤサ大学
- 5 バンカ・ビリトゥン大学社会政治学部
- 6 ジョグジャカルタ・スナン・カリジャガ国立イスラーム大学布教・コミュニケーション学部
- 7 パランカラヤ大学国際熱帯泥炭管理センター
- 8 アイランガ大学熱帯病研究所
- 9 ブラウィジャヤ大学文化研究学部
- 10 インドネシア大学環境科学研究科
- 11 シアクアラ大学津波防災研究センター
- 12 マタラム大学、ウダヤナ大学
- 13 アチェ・インド洋研究国際センター
- 14 インドネシア共和国国立公文書館
- 15 シアクアラ大学防災学研究科

カンボジア

- 16 王立芸術大学
- 17 王立農業大学
- 18 王立ブノンペン大学
- 19 アンコールとシエムリアップ地域の保全と管理機構 (アプサラ機構)
- 20 カンボジア平和協力研究所
- 21 ボバナ視聴覚リソースセンター

シンガポール

- 22 シンガポール国立大学人文社会科学部

タイ

- 23 コンケン大学医学部
- 24 コンケン大学看護学部
- 25 ウボン・ラチャタニ大学政治学部
- 26 プリンス・オブ・ソククラ大学理学部
- 27 マハーチュラーロンコーン仏教大学仏教研究所
- 28 チェンマイ大学社会科学部
- 29 メーファールアン大学社会イノベーション学部
- 30 モンクット王工科大学ラートクラバン校建築学部
- 31 アジアセンター
- 32 コンケン大学農学部

フィリピン

- 33 サンカルロス大学セブアノ研究センター
- 34 ビサヤ州立大学
- 35 カヴィテ州立大学獣医生命学部

ベトナム

- 36 カントー大学理学部
- 37 ヴィン大学教養学部

マレーシア

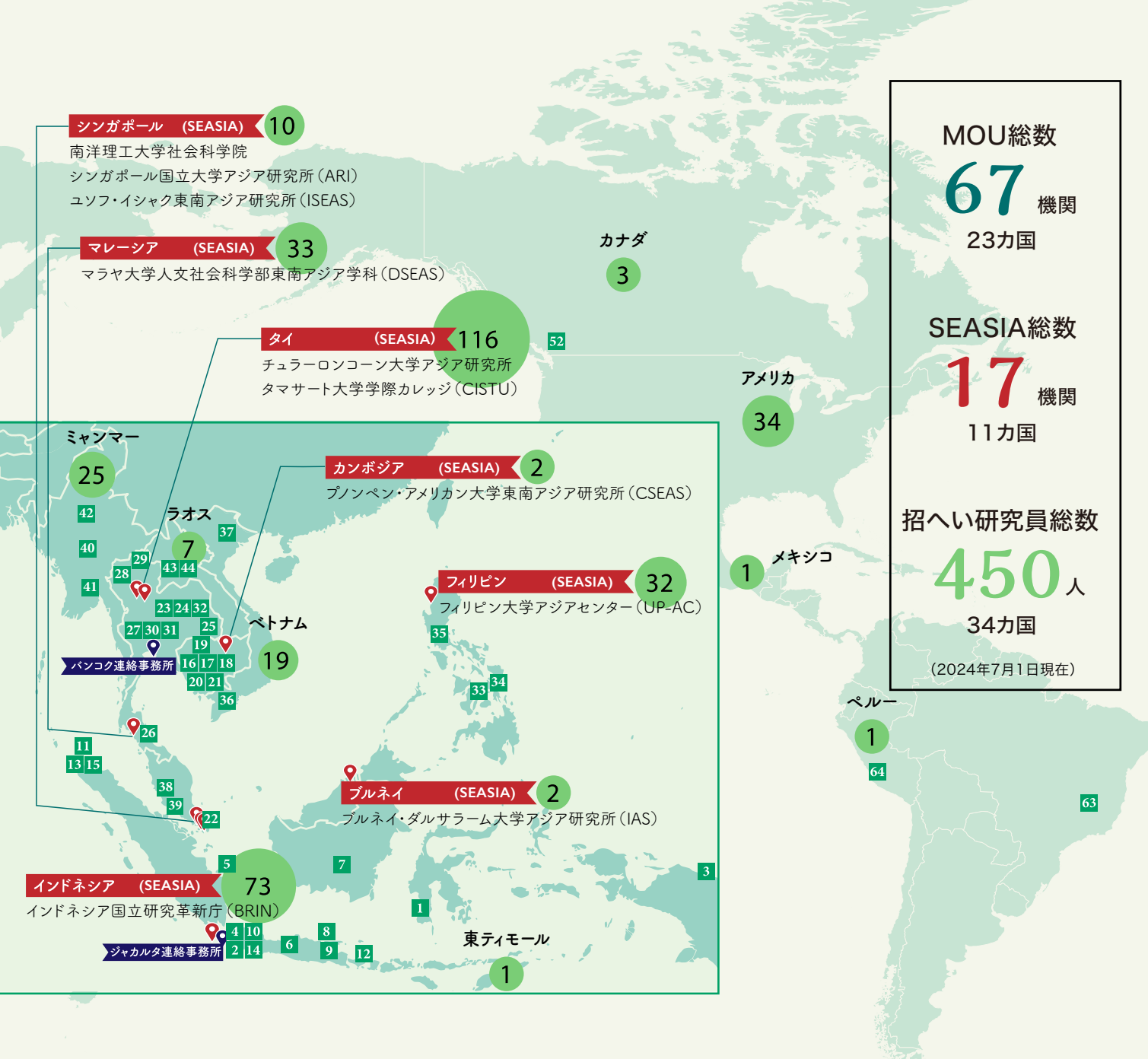
- 38 マレーシア森林研究所
- 39 サンウェイ大学ジェフリー・チア東南アジア研究所

ミャンマー

- 40 イェジン農科大学
- 41 東南アジア教育大臣機構歴史伝統地域センター
- 42 マンダレー大学

ラオス

- 43 ラオス国立大学林学部、農学部、社会科学部
- 44 ラオス農林省国立農林業研究所



- 英国**
- 45 レスター大学地理学科
 - 46 環境・漁業・水産養殖科学センター
 - 47 オックスフォード大学 マヒドンオックスフォード熱帯医学研究ユニット熱帯医学・グローバルヘルス研究センター
- エジプト**
- 48 カイロ大学アジア研究所、政経学部
- エストニア**
- 49 タリン大学人文学部
- オーストラリア**
- 50 シドニー大学シドニー東南アジア研究センター
- オランダ**
- 51 国際アジア研究所
- カナダ**
- 52 ブリティッシュ・コロンビア大学大学院 公共政策・国際問題研究科
- 大韓民国**
- 53 淑明女子大学校アジア女性研究所
 - 54 全北大学校東南アジア研究所
- スウェーデン**
- 55 スtockホルム大学 スtockホルムグローバルアジアセンター

- 台湾**
- 56 台湾中央研究院人文社会科学研究中心アジア太平洋地域研究センター
 - 57 国立政治大学東南アジア研究所
 - 58 国立暨南国際大学東南アジア研究所
 - 59 国立暨南国際大学東南アジア研究学部
- バングラデシュ**
- 60 バングラデシュ国際下痢症研究センター
- ブータン**
- 61 ブータン王立大学シェルブッシュ・コレッジ
 - 62 ブータン王国保健省
- ブラジル**
- 63 ミナス・ジェライス連邦大学
- ペルー**
- 64 ペルー問題研究所
- 中国**
- 65 香港城市大学東南アジア研究センター
 - 66 暨南大学国際関係学院/華僑華人研究院
 - 67 華僑大学グローバル華僑華人研究地域研究所

Education

教育

Southeast Asia Seminar

東南アジアセミナー

<https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp/seas-top/>



本研究所は1977年以来、東南アジアとその周辺地域の研究に関心を持つ学生や若手研究者を対象に、約1週間程度のフィールド参加型集中セミナー「東南アジアセミナー」を開催しています。学際的な研究、フィールドに根差した研究を特徴とする本研究所ならではのテーマを掲げて受講者を募り、所内外の講師による講義、現地視察と討論という形で開催しています。

第33回（2009年度）を英語によるセミナーとして京都で実施したのを契機に、第34回（2010年度）以降は受講者の公募を海外にも広げ、セミナー自体も東南アジアの大学と連携して海外で実施するようになりました。2024年現在、セミナー開催数は48

回、開催国は11を数え、総受講者は1,090名にのぼります。

コロナ禍によるオンラインウェビナー形式での開催を経て、第47回（2023年度）をタイ・ミャンマー国境沿いのタイ・ターク県にて、マヒドン大学熱帯医学部医療研究フィールドステーション（SMRU）との共催で実施し、国境地域の様々な課題について議論と考察を行いました。第48回（2024年度）は「新しい都市生活の共創—気候変動時代における生活の質向上のために」をテーマに、インドネシアのジャカルタとスラバヤにて、本研究所とダイキン工業との産学共同研究プログラムの一環として、現地機関との共催により実施しました。



第47回東南アジアセミナー（2023年12月、タイ、ターク県）



第48回東南アジアセミナー（2024年10月、インドネシア、ジャカルタ・スラバヤ）

Postdoctoral Fellowship

研究員の受け入れ

<https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp/education/#toc-id5>



本研究所では、多分野・多国籍のポストドク等若手研究員を積極的に受け入れています。現在、本研究所が公募する機関研究員のほか、学内の白眉プロジェクト助教や科研費事業を含む各種プロ



ジェクト研究員、日本学術振興会特別研究員などが在籍しています。また、所外の研究機関等に所属する若手研

世界中から集まった
若手研究者たち

究者を連携研究員として受け入れています。

これらの研究者は自身の研究を推進するだけでなく、所内情報共有の場である所員会議や所内で開催されるセミナーにも参加しています。また、自らセミナーやワークショップを企画・実施し、若手同士で議論する中から新たな研究プロジェクトを立ち上げています。

本研究所では、若手研究者が内外の多様な研究者と交流しあい、研究プロジェクトを実施する経験を重ね、研究者として重要なステップを築いていけるよう、研究環境を整備しています。

Graduate Program

大学院教育

<https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp/education/#toc-id2>



本研究所は、1981 年度に大学院農学研究科の熱帯農学専攻を協力講座として担当して以来、東南アジア研究と関連の深い学内の大学院における教育に積極的に協力してきました。1993 年度より人間・環境学研究科において東南アジア地域研究講座を担当し、1998 年のアジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）の発足以降は、ASAFAS における主として東南アジア研究の分野での教育に大きく貢献してきました。

本研究所が主幹となり、ASAFAS と共同で実施したグローバル COE プログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」（2007 ～ 11 年度）を契機に 2009 年にグローバル地域研究専攻が設置され、2012 ～ 14 年度には「アジア・アフリカの持続型生存基盤研究のためのグローバル研究プラットフォーム構築プロジェクト」（脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム）を共同展開するなど、ASAFAS と緊密な協力関係を維持してきました。

現在、本研究所は ASAFAS の東南アジア地域研究専攻「総合地

域論」講座を協力講座とするほか、同専攻の「生態環境論」および「地域変動論」、またグローバル地域研究専攻の「イスラム世界論」において、本研究所の教員が、授業やゼミの担当、論文指導、学位審査、オープンキャンパスや入試など各種行事に協力し、大学院教育に携わっています。さらに、大学院医学研究科の社会健康医学系専攻において協力講座、医学専攻において教科を担当し、また 12 部局協力によるグローバル生存学大学院連携プログラムでも、授業の提供や院生の指導を行っています。



オープンアクセスで刊行したブックガイド
中西嘉宏・片岡樹編『初学者のための東南アジア研究』（京都大学東南アジア地域研究研究所、2022 年）。<https://edit.cseas.kyoto-u.ac.jp/ja/syogakusya/>

Undergraduate Program

学部生向け教養・共通教育

<https://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/freshman-guide/ilas-seminars>



多分野・多国籍にわたる研究の蓄積をもつ本研究所は、京都大学が推進する国際化に協力し、ポスドク・大学院教育から学部生へと教育対象を拡大して、国際高等教育院が実施する学部生向けの教養・共通教育科目、および少人数科目群（ILAS セミナー）にてセミナーを提供しています。

2015 年度より「英語で学ぶ教養・共通科目」を、2017 年度以降は「教養・共通教育集中講義プログラム」にも本研究所教員が

セミナーを提供し、東南アジアを通じた異文化間コミュニケーションや人文地理学、宗教論、比較宗教論、アジア社会入門、文化人類学入門、グローバリゼーション入門などを教えています。また、大学初年次向けの少人数科目群（ILAS セミナー）にて「ブータンにおける暮らしと健康」、「映画で読み解くアジア」、「アジア乱読」などのユニークな科目を提供しています。

教育

Highschool-University Collaboration Program

高大連携事業

<https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp/education/#toc-id4>



本研究所では、高大連携事業の一環として文部科学省のスーパーグローバルハイスクール（SGH）プログラムに取り組んでいます。SGH 指定を受けた高校が本研究所を訪問し、日本と東南アジア諸地域が抱える共通の課題について英語で報告・討論を行い、高校生の能動的・多面的学習を支援しています。2018 年度からは、所員の様々な研究活動を紹介するオンライン動画プログラムの配信を開始しました（35 ページ参照）。また、京都大学が実施する「キャンパスガイド」などの近隣府県教育委員会との連携事業や高校生のための体験型科学講座「ELCAS（エルキャス）」、大学案内冊子「知と自由への誘い」「KyotoU Future Commons」（125 人の研究者が未来を語るビジュアルブック）などの事業に積極的に協力しています。



高校生のための体験型科学講座「ELCAS（エルキャス）」での講義

Awards and Honors

受賞・栄誉

<https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp/award/>



受賞者	賞名	受賞年月	受賞対象研究等
Walden Bello	アムネ스티・インターナショナル・フィリピン イグナイト賞	2023 年 5 月	(傑出した人権擁護活動に対して)
山田千佳 Youdil Ophinni	第 1 回「International Conference on Drugs Research and Policy」最優秀口頭発表賞	2024 年 5 月	Reimagining Harm Reduction Through its Genealogy in Indonesia
清水展	瑞宝中綬章	2024 年 11 月	(長年にわたる公務への貢献と顕著な成果に対して)
飯塚宜子	地域研究コンソーシアム賞 (JCAS 賞) 社会連携賞	2024 年 11 月	(「マナラボ 環境と平和の学びデザイン」の実践する教育ワークショップ「地球たんけんたい」に対して)
志田夏美	日本学術振興会 育志賞	2025 年 2 月	絨毯織りからみるウズベク牧畜民の「伝統」と生活文化

Outreach

アウトリーチ活動

Visual Documentary Project

ビジュアル・ドキュメンタリー・プロジェクト (VDP)

<https://vdp.cseas.kyoto-u.ac.jp/>



Visual Documentary Project (VDP) は東南アジアの映像作家が制作する短編ドキュメンタリーを募集・上映するプロジェクトです。作品を通して東南アジアの社会全体が抱える諸問題を多角的な視点で捉え、議論を深める場を提供することを目的としています。

本研究は 2012 年度より本事業を開始し、2014 ~ 19 年度には国際交流基金アジアセンターとのパートナーシップ事業として、2020 年度以降は独自事業として、2023 年度まで毎年新たなテーマのもとに作品の公募と選考を行い、入選作品の制作にあたって監督を招いて上映会を開催してきました。

これまでに約 1,000 作品の応募があり、54 の入選作品を上映しました。2013 年度以降は入選作品に日本語字幕を追加するとともに、京都国際映画祭、カンボジア国際映画祭、ボパナ視聴覚リソースセンター等各国のドキュメンタ

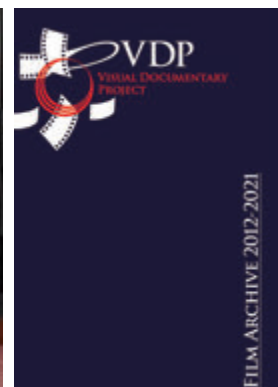
リー映画祭や学術機関の協力のもと、各種国際イベントでも上映を行ってきました。

2023 年度には VDP のサイトをリニューアルしてデジタルアーカイブを開設し、主に教育利用、非営利目的での利用のために入選作品の貸し出しを開始しました。



左：入選作品の監督を招いて実施した VDP 2023「笑!」上映会 (2023 年 12 月)

右：VDP フィルムアーカイブ 2012-2021 冊子版 (<https://vdp.cseas.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2023/04/Visual-Documentary-Project-Film-Archive.pdf>)



TANKEN Video: Welcome to Area Studies

たんけん動画 地域研究へようこそ

<https://onlinemovie.cseas.kyoto-u.ac.jp/>



本研究所では、人文社会科学から自然科学までさまざまな学問分野を専門とする研究者が、ある特定の地域に固有の考え方や文化、政治、経済、農業などの仕組みをできる限り現実に忠実に把握すべく、主に東南アジアを対象に研究に励んでいます。この多彩な所員の活動を中学生や高校生、一般向けに紹介するため、2018年度から動画を配信しています。

専門的な内容をわかりやすく工夫し、シリーズ「たんけん動画 地域研究へようこそ」として1動画を10分ほどにまとめ、日本語と英語で発信しています。視聴者が動画で紹介された研究に興味をもったさい、さらに関心を深めてもらえるよう、各研究に関連した文献情報も含めています。

コロナ禍により、私たちはフィールドワークを行ううえで大きな困難を経験しました。本プログラムでは、個々の地域の情報や研究テーマだけでなく、調査手法についても紹介しています。

2023年度には、「たんけん動画 地域研究へようこそ」で紹介したキーワードや新たな研究トピックについて、視点・論点を絞って5分間で紹介する動画「たんけん動画 5 min.」シリーズを立ち上げました。東南アジアやその周辺地域での本研究所のフィールドワークの経験を共有するこれらの動画を、地域研究へのより親しみやすい入口として活用していただけ願っています。



Booktalk on Asia

ブックトーク・オン・アジア

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLYNr5XeQb9WIM8svoGgRYPkshsISO3iKW>



本研究所では、2021年1月にアジアに関する新刊書籍を紹介する音声プログラム「ブックトーク・オン・アジア」の配信を開始しました。このプログラムは、毎回書籍の著者をゲストとして招き、中西嘉宏准教授が聞き手を務め、著者に執筆の背景や書籍の内容についてじっくり話を伺うもので、2023年12月まで約3年にわたり、毎月2回、第2・第4水曜日に配信を行い、制作を本研究所編集室が担当しました。リスナー層には研究者コミュニティやアジアに関心のある人たちを主に想定し、新刊本の紹介にとどまらず、堅くみられがちな研究者の実際の人柄を知ってもらうことも目的としました。

現在新たな配信は行っておりませんが、これまでに配信した75のエピソードは引き続き「シーズン1」としてYouTubeにてご聴取いただけます。

YouTubeで配信中のエピソード一覧

<https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2024/04/85a39092cf57c3eebd29d792e2fb80e7.pdf>

Corona Chronicles: Voices from the Field

コロナ・クロニクル—現場の声

<https://covid-19chronicles.cseas.kyoto-u.ac.jp/>



2020年3月11日に新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的大流行がWHOによって宣言され、これまでに多数の人々が感染し、死亡したと確認されています。この前例のない出来事をもたらす帰結を注意深く観察するため、本研究所は2020年4月に「Corona Chronicles: Voices from the Field（コロナ・クロニクル—現場の声）」というオンライン・プラットフォームを立ち上げ、東南アジア地域を中心に、南米や中央アジアも含め、現地、現場のさまざまな視点や声を集めて発信していくことにしました。

各国・地域の研究者、作家や映画監督、ジャーナリスト、医療・保健の専門家などに執筆を募り、COVID-19がどのように個人、コミュニティ、国家に影響を与え、国家やコミュニティの反応が人々にどういった影響を及ぼしているかについて最新の知見を集め発信しています。多様な書き手による解説・分析記事、観察は読者に独自の視点と洞察を提供し、記事を読み比べることで地域の比較もできます。このプラットフォームを通じて、地域研究の最前線を提供し、新しい地域研究の芽を育てたいと考えています。

東南アジア図書室保存基金 図書室の一般公開と資料展

<https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp/libkikin/>



本研究所図書室本館は、1880年代の旧京都織物会社の赤煉瓦建築を転用しています。2024年8月、この建造物が文化庁登録有形文化財に登録されました。2023年9月には図書室本館建築および史資料の将来にわたる保存と公開を目的として「東南アジア図書室保存基金」を開設しました。同年より「京都モダン建築祭」に参加し、図書室本館の一般公開や講演会を開催しています。

また、2024年度には図書館相互利用制度10年の節目に、アジア経済研究所図書館との共催で資料展「東南アジア激動の時代の雑誌展」を実施するなど、様々な形で資料の公開と利用促進のあり方を模索しています。

図書室の文化庁登録有形文化財登録を記念して開催された講演会案内ポスター（右）
アジア経済研究所図書館と共催した資料展（下）



各種媒体による情報の定期配信

<https://newsletter.cseas.kyoto-u.ac.jp/>



本研究所ではウェブサイトやニュースレター、メールマガジンなど各種媒体を利用して、研究所と所員の教育研究活動に関わる最新の動きを迅速に配信しています。また研究所に滞在中の訪問研究者へのインタビューを随時公開しています。ブログ形式で配信している月刊のニュースレターには所員のインタビューや研究紹介記事をはじめ、図書室が所蔵するコレクションの紹介や所員による書籍紹介コラムなども設け、研究所の活動を幅広く一般に向けても発信しています。



招へい研究員へのインタビューシリーズ「Visitor's Voice」。その一部を日本語に翻訳して公開しています
<https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp/category/vv/>



ニュースレターではインタビューや研究紹介「ノーツ・フロム・ザ・フィールド」、書籍紹介「かもがわ便り」など多くのコラムを設けています

Gender Equality Promotion 男女共同参画推進の取り組み

<https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp/cseas-gepc/>

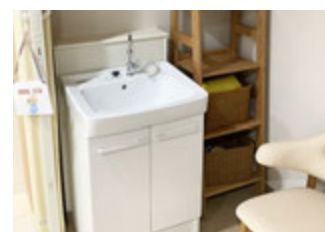
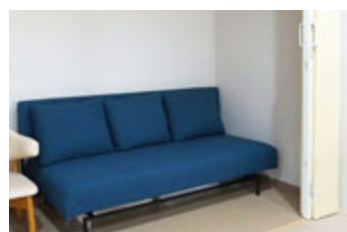


本研究所は、2016年度に男女共同参画推進委員会を設置しました。この委員会を中心に、京都大学の男女共同参画推進アクション・プランに基づいた部局アクション・プランを作成し、下記のような活動に積極的に取り組んでいます。ウェブサイト上に部局アクション・プラン、本研究所のジェンダー・バランス、国際セミナーの実施状況、休憩スペースおよびキッズ・スペースなどに関する情報を常時掲載しています。

本研究所の主な取り組み

- 1 研究教育機関における男女共同参画推進に関するトピックを含む、ジェンダー関連の国際セミナー「Seminar on Gender Issues in Academia」および「Special Seminar: Frontiers of Gender Studies in Asia」の企画・開催
- 2 託児サービス支援（本研究所主催行事などにおける託児室の設置、シッター派遣補助）
- 3 休憩スペース、キッズ・スペースの提供（東棟1階ユーティリティ・ルームに、休憩や授乳に利用したり、子供と一緒に過ごしたりできる多目的休憩スペースと必要な備品類を整備）
- 4 スタッフの公募における女性の応募の推奨

東棟の多目的休憩スペース



Faculty & Staff

スタッフ一覧

所長	三重野 文晴
副所長	岡本 正明 小林 知

研究部門

相関地域研究部門	
教授	R. Michael Feener 小林 知
准教授	山本 博之 西 芳実
特定研究員	Maida Irawani Krisztina Anna Baranyai Maria Eliza Hidalgo Agabin Sheak Mahfujur Rahman Kwan Ching Yi Paing Thet Phyto 石井 周 Fikri Abdul
連携教授	柴山 守 速水 洋子
連携准教授	平松 秀樹 Kirdsiri Kreangkrai Matteo Miele
連携講師	光成 歩
連携助教	Theara Thun
連携研究員	佐治 史 Mohamed Shamran Sofiani Sabarina Nursalmah Abhirada Komoot 池田 瑞穂 吉澤 あすな 内山 三晴 粟飯原 大 Shaiha Ahmed
学振特別研究員	柴山 元
研究生	Wenny Dhaniyati
招へい研究員	Philip Michael Fountain
外国人共同研究者	I Putu Agus Juli Sastrawan
政治経済共生研究部門	
教授	貴志 俊彦 岡本 正明 Pavin Chachavalpongpun
准教授	中西 嘉宏 翟 亜蕾
機関研究員	久納 源太 菊池 泰平
連携教授	水野 広祐 吉川 みな子

連携教授	小林 寧子
連携准教授	河野 元子
連携講師	今村 祥子 Boon Kia Meng
連携研究員	坂川 直也 足立 真理 福家 悠介 西尾 善太 八木 暢昭 上原 健太郎
学振特別研究員	瀬名波 栄志
研究生	賈 舸 Suphanut Aneknunwong Marco Antonio R. Bautista
招へい研究員	Gregory Vincent Raymond Wahyu Prasetyawan
招へい外国人学者	Luo Dan

社会共生研究部門	
教授	小泉 順子 Caroline Sy Hau 帯谷 知可
准教授	Decha Tangseefa 大野 美紀子 Majid Daneshgar
助教	設楽 成実 土屋 喜生 土佐 美菜実
特定助教	Mostafa Khalili
連携講師	直井 里予
連携研究員	Frey Urszula Anna 熊谷 瑞恵 Carla Tronu Montane Patrick McCormick 並木 香奈美 中村 朋美 Sabina Choshen 白石 華子 Azar Mirzaei 渡辺 彩加
学振特別研究員	志田 夏美
招へい研究員	Matthew Thomas Reeder
外国人共同研究者	Yu-Ning Chen Mirlan Bektursunov

環境共生研究部門	
教授	山崎 渉 甲山 治
准教授	柳澤 雅之 坂本 龍太 木村 里子
助教	木谷 公哉 小川 まり子 山田 千佳
特定助教	赤松 芳郎 Youdiil Ophinni
研究員	山崎 安子 安藤 和雄(連携教授) 飯塚 宜子(連携研究員) 矢嶋 吉司(連携研究員) 荒井 修亮(連携教授)
連携教授	奥宮 清人 松林 公蔵 内田 晴夫 林 泰一 甲山 隆司 大橋 厚子 藤田 正治 河野 泰之
連携准教授	渡辺 一生 石本 恭子 藤澤 道子 和田 泰三 小藪 太輔 塩寺 さとみ 木村 周平 兼子 千穂
連携講師	西本 希呼
連携助教	広崎 真弓
連携研究員	飯塚 浩太郎 野瀬 光弘 神藤 恵史 細淵 倫子 友尻 大幹 澤田 英樹 阿部 朱音 川崎 直子 澁谷 由紀 福島 直樹

学振特別研究員	皆木 香渚子
招へい研究員	Sonam Kinga
招へい外国人学者	Johanna Wilhelmina Rosalie Maria Schreurs

グローバル生存基盤研究部門	
教授	石川 登 三重野 文晴 村上 勇介
准教授	Mario Ivan Lopez 町北 朋洋
助教	高橋 知子
特定助教	Julie Ann de los Reyes
連携教授	杉原 薫 加賀爪 優 藤田 幸一 阿部 茂行 Wilhelmus Arianus De Jong Ofer Feldman 原 正一郎 清水 展 大野 俊
連携准教授	馬場 弘樹 外山 文子 Cao Thi Khanh Nguyet 藤枝 絢子
連携講師	芦 宛雪 Andrea Yuri Flores Urushima 川本 佳苗
連携研究員	Ami Aminah Meutia Cyprianus Jehan Paju Dale 神谷 俊郎 Wu Yunxi Samuel Matthew Girao Dumlao 平田 礼王 Aung Wai Yan
学振特別研究員	大橋 麻里子
研究生	Zhou Xiaoyu
招へい研究員	Nathan Badenoch(連携准教授)
地域研究国内客員部門	
客員教授	根本 洋一 岸 健太 芹澤 知広
客員准教授	藤倉 哲郎

内部組織

研究支援室	
研究支援室 1	
	河合 友子 阿部 千暁 鎌田 京子 西山 直子 敷田 奈々江
研究支援室 2	
	西 賀奈子 川島 淳子 友井田 貴砂子 伊藤 ゆかり 中村 佳代 石神 祥子
グローバル社会連携室	
	明渡 真沙子 土倉 祐美子 近藤 素子

図書室 地図・資料室	
図書室	
	仲野 浩子 須鹿 恵 西村 路子(地図・資料室兼任) Rasiga Chiranukrom 横田 佑実 前原 麻希
地図・資料室	
	篠 美矢子
編集室	
	川上 美智子
情報処理室	
	奥西 久美 坂井 淳一

研究室	
	井出 美知代 片岡 稔子 大鹿 梨恵 北 由貴子 引地 尚子 中村 朋美 大石 聖華 小畑 句子 山本文 中村 若菜 河合 深雪 齊藤 直代

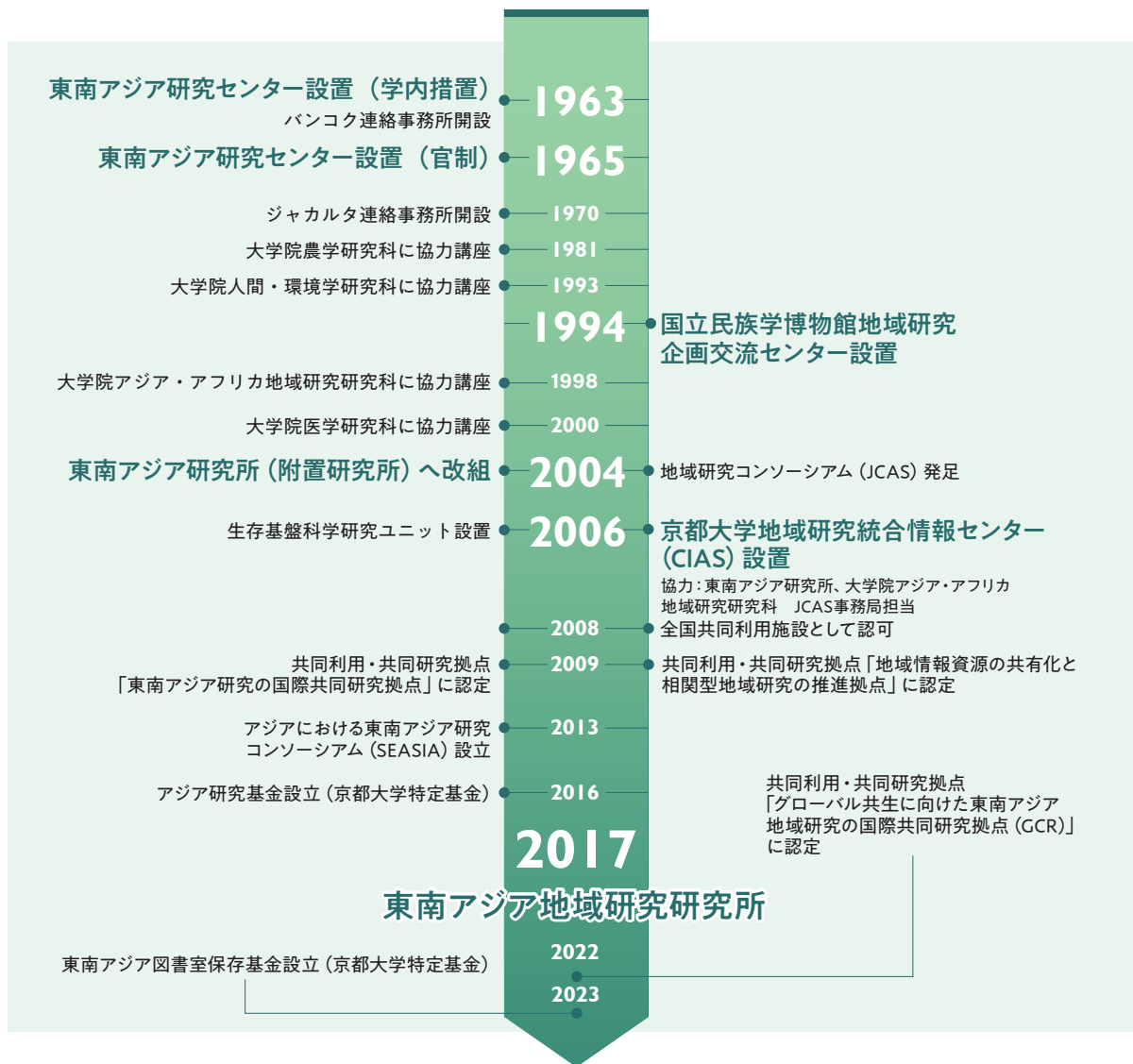
事務組織

地域研究事務部	
事務長	瀧本 健
事務長補佐	神徳 智恵(総務掛長兼任)
総務掛	
	木村 彩 藤原 七海 日高 未来 中川 裕子 香山 幸男 藤田 文夫 土佐 優太
教務掛	
掛長	荒木 茂 山下 彩佳 井上 須麻子

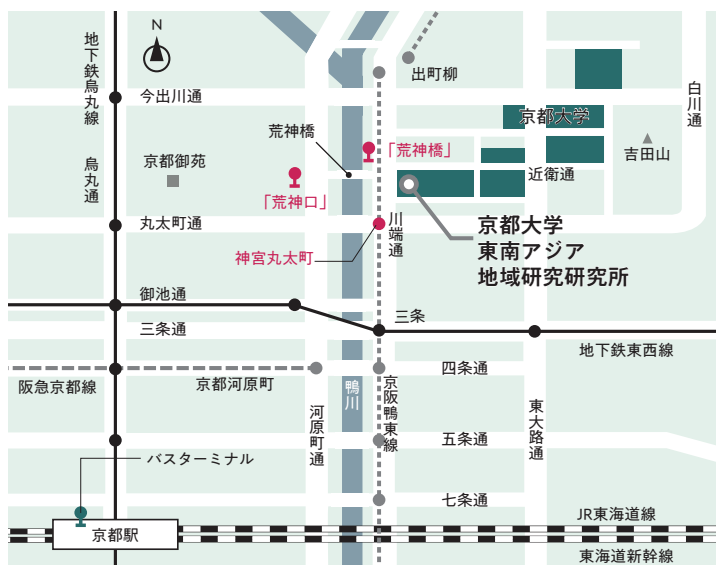
(2025 年 1 月 1 日現在)

History of CSEAS

沿革



アクセス



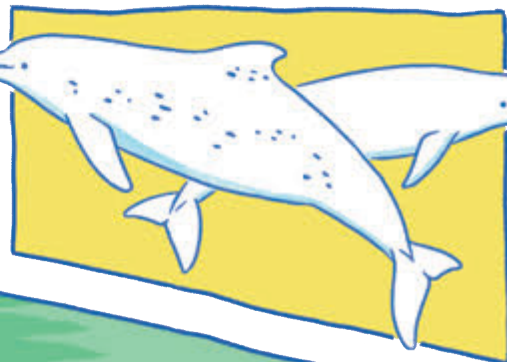
JR 京都駅から		所要時間
市バス（4、7、205 系統）	「荒神口」下車、バス停より東に徒歩 5 分	約 30 分
京都バス（17 系統）	「荒神橋」下車、バス停より南に徒歩 1 分	約 30 分
タクシー	「荒神橋東詰の稲盛財団記念館へ」とご指定ください	約 30 分
京阪三条駅から		所要時間
京阪本線「出町柳」行き	「神宮丸太町」下車、北に徒歩 3 分	約 10 分
阪急京都河原町駅から		所要時間
市バス（3、4、7、37、59、205 系統）	「荒神口」下車、バス停より東に徒歩 5 分	約 15 分
京都バス（特 16、17 系統）	「荒神橋」下車、バス停より南に徒歩 1 分	約 15 分

※本研究所から京都大学正門までは約 1km の距離があります

●表紙について



(1) モルディブで発見された像 (2) フィリピンのサリサリストア (3) 東南アジアの開放的な住居 (4) 津波で被災したスマトラ島のモスク (5) ブータンの民族衣装 (6) スナメリとシナウスイロイルカ (7) タイの寺院とナーガ (8) インドネシアの漁村の漁獲物 (9) アウトリガーボート (10) 水牛 (11) マレーシアの街並み (12) バロン (13) タイ料理 (14) CSEAS 図書室資料と映像文化研究 (15) ドローンでの調査 (16) タイ・ミャンマー国境地域の子供たち (17) 熱帯泥炭地の水文気象情報共有アプリとレーダー (18) アブラヤシ (19) 高谷好一 (20) CSEAS の 5 つの部門を表現した木製ボート



Center for Southeast Asian Studies

Kyoto University

京都大学

東南アジア地域研究研究所



〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46

TEL 075-753-7302

FAX 075-753-7350

<https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp/>

© 2025 京都大学東南アジア地域研究研究所

ISBN: 978-4-906332-68-7

表紙イラスト／きのしたちひろ

